

特220-851



1200601042268

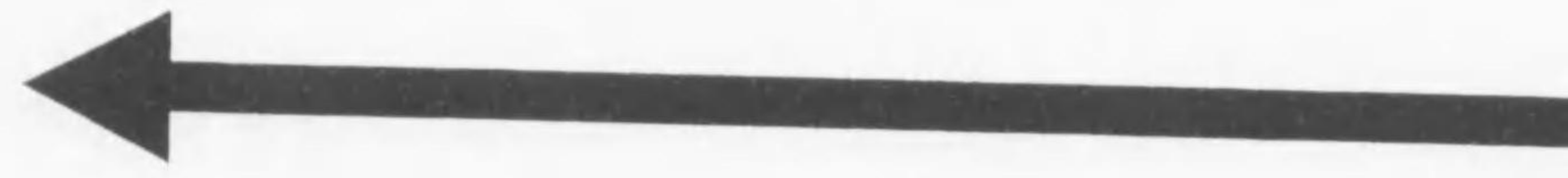


興亞教育卜國民學校一卷

滿洲移民協會



始





育 教 植 拓 盤 角



會 協 住 移 洲 滿 法財
人團

序 文

鳥取縣米子市角盤國民學校は、高等科男子八百名を以てなる從來の高等小學校である。

本校の拓植教育に關しては、曩に極めて概略ではあつたが、本協會の機關雜誌「開拓」に紹介したこともあり、其の爲各方面より、最少し深く知りたいとの熱心なる懇望に接し、折も折、國民學校制の實施となり、我が國民教育に一新紀元を畫した時機に、更に紹介の勞を採ることは、御國の爲、意義深きものあらんと考へ、同校校長大西先生の協力を得て刊行した次第である。

同校教職員各位には御繁忙の中此の出版に御協力下されしことをこゝに厚く感謝する次第である。

序 文

角盤國民學校は毎年高等科卒業兒童中より、青少年義勇軍を送出し、特に昭和十六年第一次應募に當りては、卒業生中優秀なる者五拾三名を選抜して、義勇軍角盤小隊を編成し、鳥取中隊として、内原訓練所に入所せしめたのである。

一校一少隊を編成すると云ふことは、全國的に珍しいことである。

此の學校は、夙に從來の教育に飽き足らず、常に如何にせば、皇國精神に透徹せる青少年を養成し、大日本人たらしむると云ふことに苦心し、眞の教育創造に努力して來たのであつて、此の時局體制に乗じ遂に角盤拓植教育を創設したものである。

此の拓植教育こそ、義勇軍精神を以つて其の指導理念としてゐることは云ふまでもないことである。義勇軍精神とは、英米流の教育に觀る自由主義的個人主義、唯物主義的デモクラシーに逆抗し、又從來の島國的根性を是正し、海外發展の眞意を理會せしむる、眞の日本民族教育の透徹したものである。故に義勇軍精神に依る教育は、全兒童をして青少年義勇軍たらしむると云ふのでは、決してなく全兒童をして眞に日本人たるの自覺を深め確固たる信念と氣魄とを堅持せしめ、興亞聖業に翼贊せしめんとする、大國民教育である。

國民學校制にあつては、特に我が國教育の本義の徹底を期し、日本人としての正しき人生觀、國家觀、世界觀の確立に力を致し、克く大日本人たるの襟度を啓培し、天皇陛下の大御心に副ひ奉る皇國臣民の鍊成を主眼としたものである。此の我が國独自の教育體制を確立し、興亞の大國民たる基礎的鍊成を完ふするには、惟神の道に則り、教育勅語の御聖旨を奉體する、内原義勇軍教育精神に依るべきものが多々あるのである。

興亞教育は、此の理念を明確に確立すると共に、實踐的教育即ち自ら行するの信念に、徹しなげねばならぬのである。そして歐米模倣の教育思潮に徹し、惟新皇國の道を基底とせる教育であらねばならぬ。故に之が創造的運営に當つては、教育者自身が、革新的意氣と實踐力に燃えて居なければならぬのである。

角盤の大西校長は、義勇軍運動を透して興亞教育の確立を以つて終生の御奉公とされ、拓植教育の理念を明確にし、其の體制を整へ之に依つて國民學校制度を具現し、大國民教育に邁進せられつゝあり、之に加ふるに部下二十餘名の各訓導は、此の校長の理念の下に、協心戮力、眞に働き眞に楽しむの境地を齎らせられつゝあることは、詢に興亞日本の國民教育上敬賀に堪えぬ次第である。

滿洲移住協會

宣傳部長

岩

本

憲

治

序

輒近、興亞教育とか拓植訓練とかいふ事が初等教育上の新しい問題となり、各地方でも何々推進隊とか興亞何々隊とかいふ様な興亞日本の推進團體も結成せられ、其の大部分が等しく滿蒙開拓の重要性に基調を置いた一大推進運動の展開であることは、洵に喜ばしいことである。

私共の採りつゝある拓植教育も、勿論時局下に於ける興亞日本の正しき國民教育であると確信してゐる。唯現在の所滿蒙開拓に重點を置き、其の重點に發展的移動性を認める教育であるから、初等教育上隨所に之が指導力點を見出すことの出来る教育でもある。従つて教師自身に眞に建國の大理想・國體の本義・日本精神の中核が明確に體認せられ、民族の恒久的發展を思念する國士的信念の確立と國士的氣魄の鍊成が圖られ、一切の私心を去つて奉公の誠を捧げ、眞に後繼日本人養成の教育の出来る決意があれば、教ふる者と教へられる者とが相信相愛、全校一體、學校一致の教育精進を續けることが出来る。而してこれが斯教育徹底上最も肝要な根本條件である。

滿蒙開拓は其の重要性に鑑み、日本國家永遠の生成發展上、國防・經濟・産業・文化等、國民教育中最も重視せられなければならぬ點であると考へる者であるから、其處に重點を置く拓植教育は興亞教育中其の中核を成すものであり、大東亞建設の根基を培ふ教育である。現代は將に世界的な一大轉換期に直面してゐるが、歴史は再び繰返すことなく、人類は常に新しき歴史をつくりといふ。今や我が大和民族は皇紀二十七世紀の初頭に於て、新しき世界歴史をつくらんとし、既に新發足をなしたつゝあるのである。現代日本に生を享けた私共は、國體の尊嚴を彌々尊嚴ならしむる爲に、世の一人の名もなき民と雖も、相借に提げ追ひ進み、あらん限りの眞心を捧げ盡すことを臣としてのこよなき光榮と確信せ

ねばならぬ。

幸ひに私共の學校では、職員相借に誓つて此の眞心を職域を通して捧げ盡さんものと、日々角盤教育に精進しつゝあつたが、今回斯教育徹底の結果として、滿蒙開拓青少年義勇軍一校一箇小隊編成送出が完遂せられた。之全く角盤小隊員諸子の決意と奮起に依るものではあるけれども、其の背後に積極性に富む父兄母姉の理解と、信念に燃え指導力の強い親切心に満ちた擔任とがあつて、遂に隊員をして「雄々しく立つ」といふ決意に至らしめたことは疑ひのない事實である。此の事は今後の角盤拓植教育上最大な強味であり、且は邦家の爲喜ばしき事であると言はねばならぬ。角盤小隊員諸子も此の事實を自らが實現したといふ誇りと喜びを眞に自覺して、雄々しく滿蒙開拓の聖業完遂に邁進してくれるものと確信してゐる。

昭和十六年四月

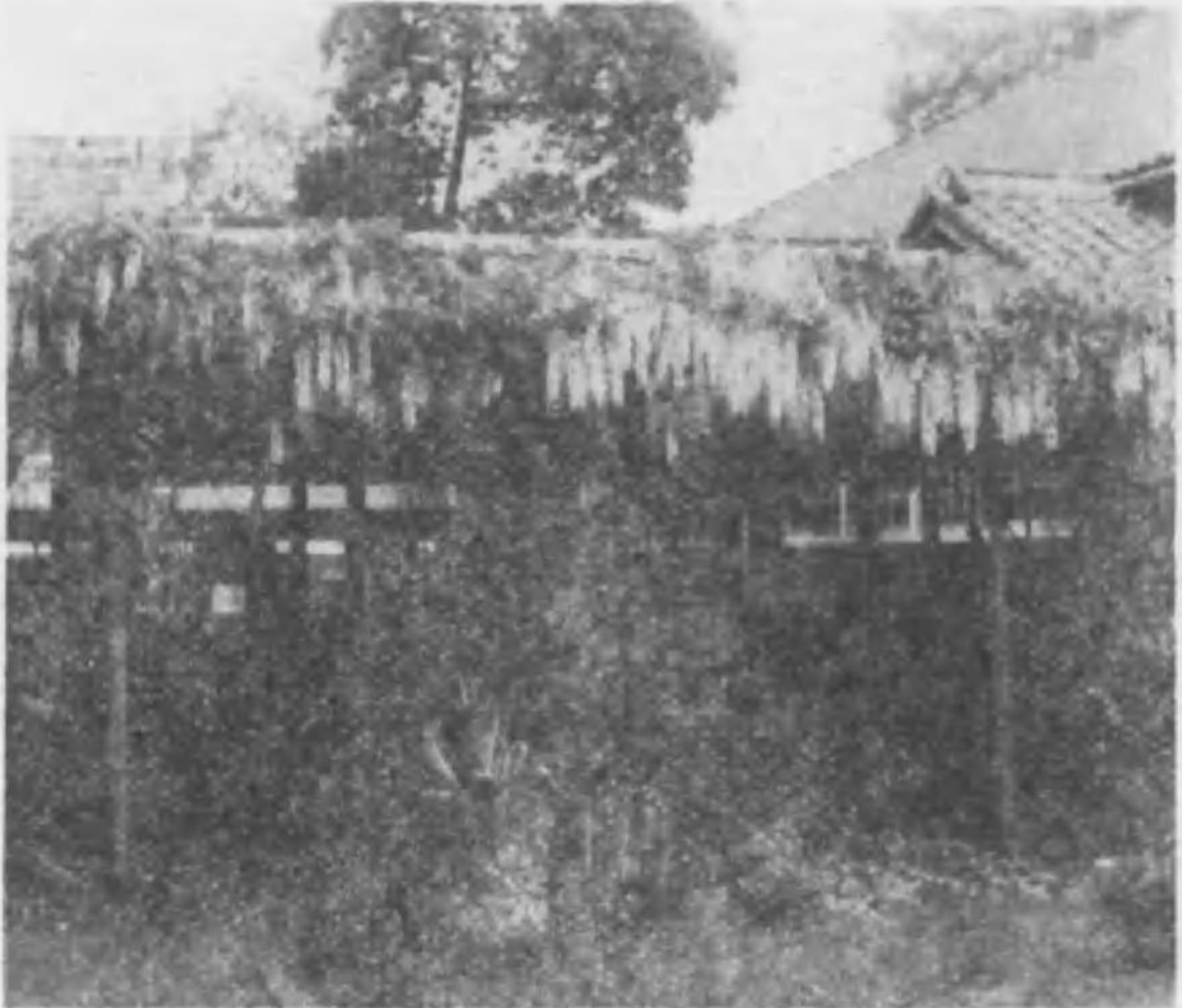
米子市角盤國民學校長 大西孟信

角盤拓植教育目次

序	一	(8) 教 練	三
一、傳統を誇る角盤教育	一	(9) 喇叭鼓隊	三
二、拓植教育への進展	三	(10) 行 軍	四
(1) 過去の角盤教育と皇國精神の鍊成	三	(11) 劍 道	六
(2) 現大西校長と拓植教育	四	(12) 國旗掲揚訓練	六
(3) 角盤拓植教育	四	(13) 非常呼集訓練	六
― 拓植教育に就いて―		(14) 日本體操	九
(ラヂオ放送全文)	五	(15) 拓植室の經營	九
三、角盤拓植教育の實際	五	四、角盤小隊編成送出まで	三〇
(1) 朝 禮	五	(1) 一校一箇小隊編成送出への念願	三〇
(2) 拓士教本講讀	八	(2) 拓植教育への拍車と教師の努力	三二
(3) 各教科と拓植教育	九	(3) 角盤小隊短期拓植訓練	三三
(4) 晝 禮	九	(一) 期 間	三三
(5) 清掃作業	〇	(二) 趣 旨	三三
(6) 農耕作業	〇	(三) 講 師	三三
(7) 終 禮	二	(四) 職 員	三三
		(五) 係 員	三四
		(六) 日 程	三五

(七) 小隊編成……………	五	(1) 現地義勇隊便り……………	五五
(八) 時間配當……………	五	(一) 門岡忠義君よりの書信……………	五五
(九) 講師指導題目……………	五	(二) 平岡均君よりの書信……………	五七
(一〇) 農事指導計畫並に要領……………	五七	(2) 郷土中隊便り……………	五八
(一一) 教練指導計畫並に要領……………	五八	(一) 松山和男君よりの書信……………	五八
(一二) 獻立表……………	五九	(二) 鷲見勇雄君よりの書信……………	六〇
(一三) 開所式次並閉所式次……………	五九	(3) 義勇軍の母の書信……………	六一
(一四) 生活訓練の實際……………	五九	(一) 吉川洋三君の母の書信……………	六一
(4) 角盤小隊の編成……………	五九	(二) 長尾勝則君の母の書信……………	六三
(5) 角盤小隊の内原入所……………	六〇	(4) 最返の加藤中隊長書信……………	六五
(一) 各種團體共同主催の祈願祭並壯行會……………	六八		
(二) 角盤小隊の郷土米子市出發……………	六九		
(三) 縣主催の壯行會……………	七三		
(四) 鳥取中隊の郷土鳥取市出發……………	七三		
(五) 隊員の東上……………	七三		
(六) 内原到着……………	七四		
(七) 身體検査に全員合格……………	七五		
五、義勇隊通信……………	七五		

一、傳統を誇る角盤教育



舎校な風古(一)風窠

明治二十年の創立にかゝる米子市角盤國民學校は、五十四年の輝かしき歴史をもつ地方稀に見る高等科男子のみの單獨國民學校である。

一度校門を潜つて古風な校舎に入れば、床板は教師と兒童の汗によつて光り、校内は隅々まで整頓せられて、自ら肅然たる感に打たれるものがある。清潔と整頓とはこの學校のもつ一つの誇りであり、五十年傳統の精神でもある。

「從順勤勉水の如く」と高らかに校歌を歌ふ健兒七百は、たゞに從順勤勉を校訓として掲げるのみでなく、日々の生活に之を表はしてゐる。

明治二十一年學生團を編成し、軍隊の制に準じて第二の國民を養成して來た事は、この學校の持つ第二の誇りであり、かの自由主義思想の跳梁せる大正の末期に於てすら、武裝して豆兵士其の儘の執銃教練を實施して來て居る。背囊を負ひ、卷脚絆に靴といふ武裝姿で元氣よく登校する國民學校兒童は、全國に

も數多く見受ける事は出来ない。

それが昨日今日に始めた思ひ付の一時的流行の施設でなく、實に五十年一貫の教育精神から生れた崇高なものであるに於ては全く敬服の外はない。



現大西校長 (二) 眞寫

現校長大西孟信氏によりて編成された喇叭鼓隊の前身には夙に軍隊喇叭があり、雨の日も風の日も吹き通して来たものである。實に五十年吹續けて来たと言つても過言ではない。喇叭と角盤校との繋がりには深く、角盤校といへば喇叭を聯想し、喇叭は角盤校を象徴する唯一のものであつた。角盤健児の吹奏する行進喇叭が單に健児達の士氣を鼓舞したに止まらず、廣く郷黨をして「いざな」の精神を鼓吹せしめたものである事は疑ひのない事實である近時國民學校兒童乃至は中等學校生徒に喇叭を吹奏させ、之を教育の一施設として重要視する風が起り、各地の學校に喇叭隊・喇叭鼓隊・鼓笛隊等の編成を見る様になつたのであるが、この學校の喇叭史は校史と共に古く、且燦然たるものである。

傳統を重んじ、しかも地味な教育をしてゐることがこの學校の持つ第三の誇りであるそしてこれが誇りの最たるものであり、角盤の角盤らしきところである。この學校は嘗つて學藝會展覽會をした事がないといふ。今もやらない。それが又何等不思議でない。五十年一貫の精神を教育の各面に散見するのであるが、時流に阿諛して朝令暮改式な物眞似教育を排撃した態度が何よりも力強く頼母しく思はれてならない。従つて總べてが實踐的であり、精神的であり、鍛鍊的である。何となく力でこ

と言つた感じがある。行軍をしても、一日の行程二十軒や三十軒では物足りなく、年に二三回は必ず四十軒以上の強行軍を實施する。尤も角盤校が國民學校高等科の、しかも男子のみといふ特殊な學校である關係も見逃してならない點である。兒童の性別といひ、年齢の點といひ、角盤校の如きは内原教育と略々同様な教育がなされて然るべき部面が多々ある様に思ふのであるが、この學校を仔細に視察し、研究する時、各所に内原の教育精神と相通するものを發見して、實に邦家の爲頼母しく感じ、且慶祝に堪へなかつたのである。

二、拓植教育への進展

(1) 過去の角盤教育と皇國精神の鍊成

過去の初等教育が歐米の教育思潮を移入して、種々の流行を追つたに對し、この角盤教育は殆んどそれ等の流行を他所に見て超然としてゐたかの感がある。或時代には、或は「舊式である。」「陳腐である。」と誹謗され、虐待されたに違ひないと思ふ。けれどもこれ等誹謗の矢表に立ちながら忍苦十數年、教育の本道を一路邁進して、根柢を不斷に培つた努力の成果を今日はつきりと見出すのである。

山陰獨特の純朴さと、鈍重なる迄に落着ける重厚さ、眞面目にして従順な性格は混然融合して、遂にこの學校の校風を育成してゐるとも言へる。五十年の傳統を誇る今日の角盤教育はそつくりその儘正しい與亞日本の國民教育であると思ふ。それだけにこの學校が如何に皇國精神の鍊成を圖り、民族的自覺の教育に専念したかは想像に餘りあるものがある。

(2) 現大西校長と拓植教育

教育の問題は畢竟するところ教師の問題に歸するのであるが、就中その中核たる學校長の問題に繋がる。現校長は昭和十二年一月鳥取縣視學より轉補され、その新鋭なる洞察力と旺盛なる氣魄を以て専心皇國の道に則る教育道を嚮進、昭和十四年秋西伯教育會に拓植部が新設されるや、初代の拓植部長に推され、身を挺して拓植事業並拓植教育の事に當つた。爾來約二年、その人格識見は教育的手腕と相俟つて遂に拓植に關する一大推進力となつたのである。

一方大西校長は興亞の理念に則る内原教育の研究をなすと共に、角盤教育の全般に亘つて再検討を加へ、鋭きメスを以て自由主義個人主義的と目されるもの一切を艾除し、皇道歸一の教育實踐に率先垂範、部下二十名の訓導を提げて立つた。その説く所平凡簡明「要は神ながらの道を體得するに在り。」と。

従つてこの學校の拓植教育は内原教育をその根幹とし、過去五十年の傳統を織込んだ皇國の道に則る教育であり、興亞の聖業を翼賛し奉る皇國民の基礎的鍊成の教育であつて、國民教育の本旨に一致する學校教育そのものである。少くとも時局下に於ける國民教育は興亞の理念を基調とせる内原教育がその根幹をなさねばならない。

(3) 角盤拓植教育

今や米子市角盤國民學校は校長大西孟信氏を中心に二十名の訓導ががちりちりと興亞のスクラムを組んで、大陸開拓の嶽の小戰士を送出すべく、日夜その根柢に培つてゐる。「日本に於ける眞の拓植教育は、國引の神話に繋がる山陰の地空港米子市より。」の意氣物凄く、昭和十五年度に於ては一學校一箇小隊編成送出を目論み、去る三月、卒業生三百五

十名中五十三名を義勇軍角盤小隊として内原に送つた。鳥取縣が總人口五十萬に足りない小縣でありながら、昭和十五年三月には三百十三名、昭和十六年三月には完全一箇中隊を突破する四百十四名の拓士を送出したその陰には、縣當局並に各方面の絶大なる興亞熱による努力と相待つてこの角盤校の植拓教育に負ふ所も亦渺からざるを想ふのである。大西校長は昭和十五年一月十四日午後三時三十分より三十分間「教師の時間」に於て、鳥取放送局のマイクを通じ、「拓植教育に就いて」と題して縣下二千五百の教職員に呼びかけたのであるが、その放送内容を見れば次の様である。



拓植教育に就いて (ラヂオ放送全文)

一、過去の日本初等教育の反省

回顧いたしますれば、明治五年學制頒布以來、我が國初等教育は明治・大正・昭和の初めにかけて、制度上に於きましても、教育の理論乃至實際に於きましても、確かに躍進的發展を見たのでありますが、併しながらそれは一括して考へて見ますれば、大體に於て歐米教育の模倣的移入時代でありました爲に、眞に日本的に同化せられなかつた憾があります。

殊に大正時代から昭和の初めにかけての初等教育界は、自由主義思潮の全盛期でありまして、これ等の教育主義思潮を採入れるのに餘りにも急いで、極端な言ひ方ではありませうけれども、全く無批判、無反省に歐米の教育主義思潮が移入せられた時代でありましたので、此の時代の我が國初等教育は、寧ろ正常なる日本教育の發展を遂げぬ時代であつ

たとは斷言出来ないと思ひます。

従つて之等の教育主義思潮の發達した歐米各國の建國歴史と、其の建國歴史を異にして居る我が國體に、到底相容れられない部分のあつたことは理の當然でありまして、皇國精神の自覺に依りまして、何時かは日本教育をして、眞に日本的に建て直す必要のある、眞の教育刷新運動が起るべきは、當然であつたのであります。

この教育刷新運動は、從來初等教育に關係した教育學者や、教育の實際家が、度々繰返したことがある所の教育刷新即ち歐米流の或一つの教育主義や、思潮、原理や方法を以て、他の教育を刷新する様な刷新とは根本的に異つた所の根本理念を、我が國教學の大本たる我が國體の本義に置く、世界唯一の眞の日本教育の確立を圖る爲の、教育刷新でなければならなかつたのであります。

併し斯く申しましても從來の日本初等教育は、其の教育が總て無價値であつたなどと考へる者ではありませんが、今から考へて見ますれば、當時の教育は確かに個人の自我實現を重視する個人の人格完成の教育であつたのでありまして何といつても個人主義的自由主義的功利的打算的な日本人を作り上げたことは否定することの出来ない事でありまして、之等過去の日本初等教育の責任は、全日本の初等教育に關係して居た教育學者と言はず、初等教育の實際家と言はず、總てが背負はなければならぬ責任であります。

二、過去の日本初等教育の不徹底

既に御承知の様に我が國は、萬世一系の天皇が、天祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ所の世界唯一の皇國であります。世界何れの國にも、其の國の建國精神と歴史はありましても、我が國の様な建國精神と歴史は、世界何れの國にも見る事が出来ないであります。我が國に於きましては、建國以來三千年、天皇の統治は國民的信仰となつて

居り、將來も亦永久に變る事のない皇國日本の大本であります。故に君臣の分は儼然と定まつて居り、皇位は絶對でありまして、諸外國に見る様な人民の信賴とか、人民の承認とか或は又委任とかによりまして、國權の基礎が定まる事は絶對にないのであります。

我が國に於きましては、臣民が天皇に仕へ奉るのは、決して服從の義務があるからとか、權力に服するといふ様な關係ではなく、建國以來三千年の永きに亘りまして、全く自然的に發達して來た自然的精神の發現でありまして、天皇に對し奉る自らなる渴仰歸一の信仰に外ならぬと信じます。

「何事のおはしますかは知らねども」

かたじけなさに涙こぼるるし

といふ絶對隨順の心境は、取りも直さず皇國日本に生を承けた大和民族でなければ到底眞に理解することの出来ない皇道歸一の信仰であります。斯様に極めて明瞭な歴史的事實の中に、生を承けて居る皇國民たる教育者が、何を好んで歐米流の教育を、眞に同化せずして、日もこれ足らずとして取入れて來たのかといふ事を反省する事に依りまして、將來は一層日本的な教育に仕上げなければならぬと考へます。何處の學校經營を見ましても、教育に關する御勅語を教育理想として居るのであります。其の實際は御聖旨を眞に具體化した實踐の教育が極めて不徹底で終り、自由主義的個人主義的教育を徹底させて居たかの憾がありましたから、教育すればする程、徹底させればさせる程、益々個人主義的功利的打算的な人間が育つたわけで、斯様に教育せられた日本人は、何を措きましても、先づ個人たる私といふ事を考へる、人間教育が徹底して、個人たる私といふことが何よりも先づ第一と考へられる様な日本人が、育つたのではありますまいか。若し全然之を否定する事が出来ないと思はしますならば、蓋し過去の日本初等教育は、皇國民鍊成の教育と根本理念に於て、甚だ相反する教育であつたが爲に、皇國民鍊成の教育といふ點に於て、確かに不徹底な點があつた

と言はなければならないのであります。

三、興亞教育の眞精神

興亞の皇國民教育、即ち興亞教育に於ては、この様な過去の教育を一切精算し、興亞日本の眞姿を具體的に採り入れ皇道に歸一する信仰と純情と氣魄とを培ひ、一意皇祚を護る所の國民教育でなければならぬのであります。別の言葉で言ひますならば、眞に興亞の聖業を翼賛し奉る皇國民の基礎的鍊成の教育、即ち皇運扶翼の道を實踐し、皇運扶翼の道に殉ずる皇國民鍊成の教育でなければならぬと確信する者であります。我が國民は、過去に於ける日清・日露の兩戰役に於て、戰役の苦闘をよく突破して、日本の世界的地位を高めた皇國民であり、近くは國際聯盟を離脱し、更に滿洲事變を経て、友邦滿洲國を建設しながら、今又支那事變に於て、世界各國の注視的となりながら、東亞諸民族の先驅として聖戰を續け、今や其の事變處理の段階に迄進めて居るのであります。併し今後幾十年かは、これ等滿支は元より全東亞を包含する大東亞建設の大使命を、大和民族の力に依つて達し、次いで八紘一宇の建國の大理想を更に全世界に光被せしめ、以て道義世界の平和確立に邁進せなければならぬ地位にまで、吾々大和民族の地位を引上げて來て居るのであります。

我れ日本人なりとの民族意識を明確に把握して居る皇國民は、何處からか祖先以來承け繼いだ大和民族の血潮が躍動を續けて居るのを感じることが出來ます。此の大和民族の血潮の躍動こそは、眞に興亞日本の使命を達成する何よりの原動力でありまして、一切の個人たる私を去つて、國體に基づく公に奉ずる至誠の躍動でなくて何でありませう。絶對的に皇道に歸一する大和民族の信仰、大和民族の生命の躍動に外ならないのであります。

興亞教育の眞精神は其處から發せなければ、動もすると末技的技巧的な教育の弊に陥つて、外影だけはよく整ふけれ

ども、其處には皇國精神を基調とする日本人としての迫力の缺けた魂の抜けた教育になつて了ふ憾があると思ひます。今の日本教育には、魂と信念と純情と氣魄の抜けた教育は何れの教育にもあつてはならないと思ひます。従つて此の意味に於きまして、日本の教育は總べて興亞國民教育即ち興亞教育でなければならぬのであります。

皇道歸一の眞精神を徹底せしめ、相偕に皇運扶翼の臣道實踐の教育を徹底せしめるのが、お互興亞教育者の任務であると確信致します。それでこそ「斯ノ道」を實踐することにもなると考へます。皇國に生を享けた吾々日本人は、師弟相偕に一切を天皇に捧げ盡して忠を致す事が、我が皇國民の誇であり、我が皇國民の喜悅でなければならぬと確信する者であります。

四、興亞教育と日滿不可分關係

滿洲國は一徳一心の建國精神を具體的に顯現し、日滿不可分關係を日と共に強化せんが爲、建國以來五族協和の旗印の下に建設に亞ぐに又建設の日を續けて居るのであります。そして我が大和民族たる日本人が、其の中核として他民族を指導する責務は今後日と共に益々其の重要性を加へるばかりであります。我が國民教育に於きましても、東亞及び世界に關し、從來の如き不徹底な教育であつては、到底五族協和の中核分子として、天祖の宏謨を奉じて滿洲建國の聖業を完遂する事は至難であります。

興亞教育に於きましては、何といつても大陸發展の教育即ち拓植教育、東亞共榮圈の確立、大東亞建設の教育を徹底させなければならぬのであります。先づ其の第一着手としては、不可分關係にある滿洲建國の聖業を完遂せなければならぬと確信致します。支那事變の處理も、南洋方面への發展も決して輕視してよいと思ふものではありませんが、乍併滿洲建國の聖業完遂すら出來ない吾々大和民族でありますならば、無論大東亞建設は申すまでもなく、道義世界の平

和確立といふことも、結局は思想又は感覺の錯誤に依つて、過つて見られる實際でない現象たる幻影を追つて居るに等しくなつて仕舞ふのではありませんまいか。それではならないのであります。吾々日本人は何處迄もこれを事實として實現せなければならぬのであります。此の意味からも、興亞教育に於きましては、眞に皇國精神に徹せる皇國民を錬成せなければならぬと確信する者であります。

五、興亞教育の徹底

興亞國民たるの根本的要素は、強烈無比なる皇國民たるの信念に徹してゐなければならぬのであります。忠君愛國、盡忠報國の赤誠も、總てが此の信念の發現たらざるものではないのであります。生爲忠孝民、死作國家神、一意護皇祚、眞成日本人、これを實踐の教育に於て、徹底させて置きますならば、世界の何處に發展する大和民族であらうとも眞の皇國民たるの資格はあります。必ずしも狭い郷土たる日本の國土に、祖先以來の狭い土地と宇を護り續けて居ることのみが、大和民族の理想であつてはならないと考へて居る者でありまして、吾々日本人の郷土觀には、斯うした發展性がなければならぬと思ひます。

八紘一宇の建國理想を考へて見ますれば、すぐに理解出来るところの吾々大和民族が本來は時代を生み、環境を生かさなければならぬ教育に於て、過去に於ては動もすれば眞に徹底した指導精神の下に教育せられなかつたが爲に、永遠の民族理想を忘れて唯單に目前の生活手段を追求する情ない島國的民族に仕上げられたのではありますまいか。

我が國史を緝けば、既に建國の當初、八紘一宇の理想實現に御着手になつて居り、神功皇后は既に海外雄飛の活模範をお示しになつて居ります。然るに、其の後に於て、或時代の政策は八紘一宇の大精神を忘れて鎖國政策をとつたが爲に明治維新の新體制を見るに至つたのであります。昭和の新體制は、正に八紘一宇の大理想を世界に光被すべき其の第

一着手と見るべきであります。

此の大理想實現の爲には、我が大和民族に先天的に備つて居る非凡なる體力と意力と知力と實踐力を遺憾なく教育に於て鍛鍊陶冶し、皇運扶翼、民族發展の爲に捧げるべきでありまして、從來の如く、體力意力知力の總てが國家のものでなくして、個人のものであるとすれば、其處には民族の破滅を見るに至る恐るべき誘惑の魔手の入り込む弱點があることを眞に自覺せしめなければならぬと考へて居ります。興亞教育に於きまして、錬成する體力、知力は總て國家のものとして錬成するのであります。究極する所、最も具體的直接的には、高度國防國家建設の爲に捧げ盡されなければならぬのであります。これが國體を護る唯一の臣道實踐であり、其處まで導くことが興亞教育の徹底であると確信する者であります。

六、拓植教育の重要性と義勇軍運動

斯様に考へて参ります時、興亞教育の目標も、拓植教育の目標も、結局は興亞理念を基調として東亞新秩序建設の聖業翼賛を完遂する皇國民錬成の教育でありまして、興亞教育も拓植教育も、結局内容の廣狹深淺の差違と、重點の相違があるだけのことでありまして、何れが我が國民教育の新動向であり、時局下に於ける正しき國家教育であると確信して居ます。従つて拓植教育が徹底すれば、其の結果として、當然自ら大陸發展の雄圖に燃ゆる青少年が育成せられることとなり、眞の開拓思想と開拓精神が養成せられ、東亞開拓の必要性を認識し、大陸を理解し、民族的使命を自覺する次代國民が養成せられることとなり、結果としては義勇軍志願者の増加を見るに至るのであります。

其の施設の實際と指導の方法に就きましては、只今申述べるだけの時間がありませんので此處では省略いたしますけれども、事實私の學校の過去と現在とを比較して反省して見ますれば、昭和十三年國策義勇軍制創設の年は、其の年

三月始めに平岡均といふ生徒が一人私の話に共鳴して呉れまして志願いたしました。そして其の年には四名、次の昭和十四年には五名、昭和十四年度には稍々指導者の信念が出来まして、昭和十五年三月には二十八名、本年度は指導者が信念をもつて、系統的に指導し、父兄にも相当理解が出来ましたので、来る三月には五十名と六十名の間は送出出来る見込であります。これは何といつても、拓植教育徹底の結果であるといふことは間違ひのない事實であります。本年度は志願したいといふ生徒は九十名近くはありますけれども、色々な家庭の事情があります爲に、前述の様な結果となるのではないかと思つて居ります。

來年三月郷土中隊に参加するといふ現在の高等一年生も約七十名位はある様であります。一年生時代からもうはつきりと決意して居るといふ事は、何といつても不斷の拓植教育の結果と言はなければなりません。話は少し横道に反れますけれども、前に述べました平岡均が去る十二月私が學校で仕事をして居ました所に思ひがけなくやつて來まして「先生歸りました」と例の義勇軍口調と態度で挨拶する所などは、實に堂々たるもので、懐しくもあり、氣高く見え、頼母しく可愛くてたまらない氣持で胸が一杯でした。平岡は早生れでしたから、今年十八になつたのであります。體格がよいので、年よりも大きく見えます。此の三月には三年の訓練を終つて、取柴河訓練所から愈々開拓地に向ひ、義勇軍開拓團を組織するのだと言つて、實に緊張しきつて居る點など、到底内地の同じ年頃の青年には見る事の出来ない信念と氣魄を備へて居るので、私は大和民族の名に於て、衷心から感謝せなければならぬと、強く感ぜさせられた者であります。

拓植教育の目標と内容は、其の觀點と時代の推移に依りまして、必ずしも一定不變のものではなく、發展性を有し、重點に移動性のある教育であると考へますが、乍併拓植教育に於て最も重視せなければならぬ根本的要件は、日本人としての自覺の喚起、信念の確立氣魄の錬成、體力の錬成、科學思想の涵養にあると信じます。そしてこれ等の根本要件

は何といつても、總てが大和民族たる民族自覺の教育として徹底せしむべきことが缺くべからざることでありまして、皇道歸一の信念を指導精神として實際指導をなすのでなかつたならば、拓植教育は不徹底となり、眞の大陸雄飛の雄圖を抱く青少年は教育せられないのであります。

大陸雄飛の雄圖を抱く青少年教育の内、就中義勇軍の使命は、時局下國民教育と不可分關係にあり、時局下國民教育上最も重視しなければならぬ點であると思ひます。故に特に高等小學校教育關係者は、其推進力として必ず拓植教育の徹底を期せなければならぬのであります。

然るに本縣の實情をいふより寧ろ全國的に見ますに、遺憾ながら未だ教育者側にも、此の熱意と信念の足りない方が相當にあり、確信と親切をもつて積極的に之が指導に當る士の妙い事を甚だ遺憾に思つて居りますが、父兄母姉側にも實に無理解な方が多い様であります。今後、教育者自身も一層拓植教育の研究を積み、信念を強めると共に、父兄母姉の啓蒙に努めなければならぬことを痛感して居ります。

一二の例を擧げて見ますれば、昨年春の義勇軍郷土中隊を送出する際、私の學校の或る職員を或る地方に出掛けさせて、或る學校の義勇軍送出に關する交渉をさせたことがありますが、その時其の職員が歸つての報告に「行つて話をし て見ました所が、自分の學校の校下には、開拓すれば開拓する土地はいくらでもあるし、近くには海もあるので、魚もいくらでもとつて食ふ事が出来るのに、何を好んで滿洲あたりまで行く必要があらうかといふことであつたので、いくら話をしても到底話にはならなかつた。」といつて大いに憤慨して歸つて來た職員もありましたが、現在はいさうでもなからうと思ひますけれども、當時は無論拓植教育といふ事に就いて考へられて居らぬばかりでなく、義勇軍の使命といふ様な事に就いても、根本的にわかつて居らなかつたのでありまして、これでは大いに啓蒙の必要があると思はせられたことがあります。これに反しまして、一般に無理解など言はれて居ります處の父兄側にも、實に頭の下るやうな考へ

を中心とする禮拜であるが、級別朝禮は學級擔任を中心とする精神的結合の儀式行事である。而して月・水・金の三日は合同朝禮を行ふ。火・木・土の三日實施する級別朝禮の形式は同一であるけれども合同朝禮の形式は多少變へてゐる。即ちこれを表示すれば次の様になる。

講堂の正面に奉祀してある五社は、皇大神宮、明治神宮、氏神（勝田神社）、靖國神社、名和神社である。學校長の禮拜に合はせて職員兒童が心を一にして拍手を打つのである。

月曜日は五社の禮拜に次いで、「青少年學校に賜ハリタル勅語」の奉讀があり、師弟相和しておほらかに「お早う御座います」の互禮を交し、學校長の訓話がある。

水曜日には勅語奉讀を行はずして健兒團の綱領を唱和する。「綱領」と學校長音頭をとれば、全員心をこめて、

「我等角盤健兒ハ勅語ノ御聖旨ヲ奉ジ心ヲ

一ニシテ相偕ニ勵ミ皇國少年タルノ信念

ト氣魄ヲ鍊成シ

神明ニ誓ツテ

天皇陛下ノ大御心ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス」

とゆつくりと力強く、肚のどん底から出る「まごころ」の叫び聲で唱和する。噫これこそ皇國精神の權化たる「いざ汝」の民族的意氣込でなくて何であらう。八紘一字の肇國理想はこの「いざ汝」の追進的意氣込なくしては、その實現も不可能と言はざるを得ない。「心ヲ一ニシテ相偕ニ勵ミ」七百の健兒は何處迄も一心同體、個人主義的な抜け駆の功名を排撃し、相互に相提携、仲のよい切磋琢磨により相偕に理想を實現せんとする天地創造の意氣込を表はすのである。

金曜日は五社の禮拜に次いで校歌を齊唱する。

校歌

(郷土)

一、仰げば高し角盤山

俯すれば廣し日本海

こゝに榮ゆる米子市の

佳き地をしめて名にし負ふ

吾が學園はひらかれぬ

(歴史)

二、歴史は長し五十年

根ざしは深し教へ草

大和心の色も濃く

忠愛の旗おし立てて

吾が兄達は進みにき

(自覺)

三、誠實自重山のごと

從順勤勉水のごと

堅忍不拔撓みなく

嗚呼名和公を鑑みにて

吾がはらからよいさ督へ

(2) 拓土教本講讀

學級別朝禮を行ふ火・木・土の朝禮後約十五分間拓土教本を講讀し、滿蒙開拓の重要性、拓土としての心構、拓土の生活等について指導をしてゐる。その實際指導に當つては、この學校に於て研究し作製せる拓土教本指導要綱に準據して、各擔任教師は信念をもつて取扱つてゐる。拓土教本は義勇軍志願者の讀本であるが、又與亞日本の國民讀本であり拓土になると否とを問はず、讀むべく且持つべき書である。級別朝禮の後、すがすがしい氣分の裡に聽講する児童にはその内容がはつきりと素直に受入れられる。角盤校に於ける拓植教育徹底施設としての拓土教本指導要綱は次の通りである。

その簡單なる序に曰く

序 與亞教育に於ては拓植教育の徹底が期せられなければならない。然るに其の實際を見ると實に不徹底で、何等の系統的指導方法が採られて居らない。國民學校制度が實施せられんとする今日、其の實施を見ざる前に何等かの形に於て與亞教育を徹底せしめたいといふ念願を持つ我が角盤教育に於ては就中拓植教育の徹底を期し度いといふ考の下に本校經營の一部に此の施設を取入れたわけである。

角盤教育に於ては、拓植思想の涵養と拓植信念の確立に二途を設け、一は當分拓土教本に據り、一は各教科取扱の際に連絡を保ちて思想涵養と信念の確立を圖る事となし、拓植訓練の精神は學校訓練の全分野に亘つて有機的連絡を保ちながら基礎的訓練を施すことを立前として居るけれども、特に角盤健兒團訓練に於て之を徹底せしめたい考へである。教本の指導は現在毎週火・木・土の三日間學級別朝禮の直後約十五分間之を指導し、一週に一時限の割を以て通年指

導をなすを立前として居る、けれども將來は本校に於て教本を編纂し、最も適切なる指導を與へんとする考へである。

指導の實際に當つては、知識を授與することを避けて信念の確立を圖ることを主眼とし、教授が餘りに微に入り細に入りたる爲に、信念を弱めるが如きことがあつてはならぬ。

(3) 各教科と拓植教育

各教科との連絡は殊に重要視してゐる。角盤拓植教育が或特定の施設に於てのみ實施されるのではなく、又或特定の時間に於てのみなされるでもないといふことは前述の通りである。即ち角盤教育の全般に亘り、殊に日々の授業中にこれが陶冶を怠らないのである。考へ方によれば、教材の總ては與亞教育の教材であり、解釋の仕方によつては教材の大部分が拓植教育の教材となり得る。先行するものは拓植教育への關心であり、教師自らの心の準備である。教材の死活は教師に在り、拓植教育振興の鍵は教師各自が握つてゐるのである。角盤校では與亞教育施設として各教科連絡指導要綱を作製し、之に準據して日々の授業を拓植教育の爲に最も効果あらしめて取扱つてゐる。

(4) 晝 禮

晝食の合圖と共に學級兒童は座席に着く。内務勤務員の一人は給茶場から全員に配給するお茶を運び、今一人は擔任の辨當とお茶を職員室から學級の食卓上に運んで擔任訓導の來室を待つ。學級擔任食卓に着き、「姿勢を正して」の言葉にて一同姿勢を正す。「御魂鎮め」にて瞑目、兩手を下腹の前に組むこと約一分間、「神ながらの心」を復唱し「直れ」の號令にて開眼、「戴きます」と感謝の意をこめて會釋をなし食事にかゝる。食事は靜肅を尊び、雜談することが許されない。よく咀嚼してこの御惠を戴くのである。食事終れば、各自約十五秒瞑目して御魂を鎮め、開眼して「戴き

ました」と感謝の眞心を以て會釋をなし、食器を片付ける。これだけの訓練がよく行届いて、御飯の有難さを感じ、豐受の大神の大前を拜みつゝ最も敬虔な態度で晝禮を終る。この晝禮の二十分間が一日中で最も静肅な時であり、又楽しい時でもある。晝禮終了の合圖があれば食後の長い休憩となり、児童が嬉戯する又最も楽しい時である。

(5) 清掃作業

學習が終れば一齊に清掃作業に取かゝる。如何なる寒中と雖も作業前には上衣を脱ぐ。仕事を始める意氣込を表はす爲にも、作業そのものの能率を高める爲にも、實によい娛である。「いざ汝」の追進的意氣込はこれから起るのである。無言は作業をする時の信條であり、師弟相僧に勵む清掃作業はその訓練の成果として床板を光り輝かせてゐるのである。

(6) 農耕作業

報國農場一町歩は角盤健兒魂を磨き上げる尊い道場である。職員兒童の汗の賜として七段五畝歩の荒地が可耕地と化したのである。放課後それ〴〵割當てられた農場へ鋤部隊が出動して、除草に中耕、或は施肥と作業が續けられる。學校長自ら先頭に立ち、額に汗して鋤を握り、人糞尿を擔いで兒童に耕種の方法を説いてゐる。教育の尊い眞の姿が此處に見出されて嬉しい極みである。



場農國報盤角と梨開 (三)眞寫

(7) 終禮

清掃作業並に農耕作業のあと、道具の整頓をして點檢を終れば終禮を行ふ。終禮はそれ〴〵の作業場或は校庭に於て行はれる。先づ集合・點檢、それから擔任訓導の作業の講評がある。終つて「御苦勞様でした」と互禮をして解散する。終禮は學校訓育の上に於て最も重要視してゐる施設である。物の始めは勿論大切であるが、終りの大切な事はその始め以上であることを忘れてはならない。この學校が特にこの點に留意して終禮を嚴守して來てゐることを見逃してはならない。常に有難く懷しみ思ふ和魂の精神はかくてこそ體得出来るのである。

(8) 教練

明治二十一年學生團を組織し、軍隊の制に準じたところ通り、開校以來今日まで實施されて來たものに教練がある。而して所謂角盤魂を不拔に培つたものも亦教練であつた。今日國民學校令によつて始めて教練科が特設されたのであるが、この學校は數十年前から體操の時間を一時限だけ割いて教練に當ててゐたものであり、體操三時間の中、體操遊技二時間教練一時間として日課の編成をしてゐたのである。之を見てもこの學校の教育が如何なる方面に重點の置かれたものであつたかが窺はれる。今日時勢は推移して當に非常時中の非常時、高度國防國家體制確立への民族的情熱によつて、教練時間特設の事に何の驚異も感じないのであるが、かの自由主義跳梁の大正時代に於ても軍隊喇叭の音勇ましく、少年兵士の姿甲斐々々しく歩武堂々行進したものである。根本に培つて雌伏數十年、角盤教育の高く評價される時代が到來したのである。皇國精神鍛錬陶冶の氣運が澎湃として全國に漲り、延いては教練の重視となり、教材としてはつきり體操科の一分科となつたことは、誠に力強き頼母しき限りである。



練 教 同 合 (四)眞寫

前代の遺物とも思はれる程古びて、殆んど骨董的價値しか認められない様な木銃二百挺が、武器室の銃架にきちんと立掛けられてあるが、一萬を突破する角燈健兒の魂を鍊り鍛へ、現に鍛へつゝあり、尙將來も幾十年と鍛へる尊い物であると思へば、轉た感なきを得ない。殊にこの教練が士氣を鼓舞し、協同團結の精神を養ひ、規律節制を重んずるの習慣を養つたことは、こゝに説明するまでもない。土曜日の第五校時、又は非常呼集によつて、随時に合同教練を実施してゐる。校旗の奉迎送はもとより、閲童分列が一条亂れざる統制のもとによく訓練されて、校庭一ぱいに繰ひろげられる様は實に一大偉觀である。この合同教練を最も効果的にし、發刺たらしめ、愉しくさせてゐるものに喇叭鼓隊がある。

(9) 喇叭鼓隊

教練と最も關係の深い喇叭鼓隊は龜尾隊長以下三十五名の中編成二箇小隊であつて、大太鼓二・小太鼓八・大ラッパ四・中ラッパ八・小ラッパ十・外に長ラッパ二・トランペット二を持つた地方籍に見る大規模なものである。第一小隊は二年生、第二小隊は一年生をもつて編成してゐる。この喇叭の歴史も教練のそれと共に古い。初めは軍隊喇叭三十名を以て編成する喇叭隊だけであつたのを、現大西校長の熱望が遂に達せられて昭和十四年八月



隊 鼓 叭 喇 (五)眞寫

一千五百圓の資金を得て購入せられたものである。喇叭隊の時代に於ては比較的隊員の素質も悪く、學業成績のよくない者もあつたが、喇叭鼓隊編成と同時に音楽との關係を密接にし、樂典の知識即ち讀譜の能力の優れた者を選抜する方針を樹てた爲優秀なる兒童の参加を見るやうになり、随つて上達も速いといふ状態である。

鼓樂の練習は實に熱心で、殆んど毎日の放課後一定時間規則的に練習をする。又この學校の練習ほど忙しい事はあるまい。高等科のみの兒童を持つ國民學校である關係上在學期間二箇年である。初等科兒童の在學する學校であれば、五年六年の時代から養成する方法も考へられるのであるが、それがこの學校では出来ない。毎年隊員の養成を必要とし、上達したと思ふ頃には修了するといふ目まぐるしさがある。随つてこの學校の喇叭鼓樂は常にこれ練習であり、隊員の養成でもある。この事は指導の任に當つてゐる訓導龜尾隊長を始め、學校當局を悩ましてゐる。それでも一年間に吹きこなす曲目は「陸軍マーチ」

「非常時日本」「戦捷行進曲」其他十數曲に達する。

この喇叭鼓樂が青年前期である少年達の血を湧かし、勇を鼓舞する事は疑のない事實である。萬里の波濤を蹴つて我が日本民族が大陸の天地へ進軍する意氣込は、この大太鼓と共に踏みしめる強い健兒達の歩調に見る事が出来る。鼓隊

を先頭に千坪にも足りない狭い運動場に合同教練を展開すれば、天は唸り地は揺ぎて七百健兒の心は躍る。青少年の意氣を昂揚し、心氣を爽快ならしめるに最も効果的なのは喇叭鼓隊であると、今更ながら深く感ずるのである。
角盤喇叭鼓隊は實に全國の國民學校に稀な大編成であり、且又稀な上達振りである。

(10) 行 軍

歩くことが體位向上の見地から如何に有効適切な體育法であるかはこゝに論證するまでもない。國民體位の向上は國運の消長に繋がる重大事である。角盤校が教練を重視して心身を錬磨したと同時に、創立以來終始一貫行軍を實施して少年の體力を不拔に培つてゐることを見逃してはならない。
その行軍實施案によれば、三月を除いて毎月實施する事にして居り、五月と十一月の行軍は相當鍛練的な強行軍である。陸軍マーチの曲も勇ましく、喇叭隊を先頭に蜿蜒長蛇の如き隊列をしいて潑刺たる少年軍は行く。これと呼應して米子乗員養成所の練習機が頭上を亂舞する。その逞しい健兒等の步調を見て、「興亞の國民教育はかくあるべし」と思はぬ者はあるまい。歩け、歩け。而して遂には海をも超えて廣袤たる大陸の沃野を。

行軍實施案

月	方	面	新	程	服	裝	摘	要						
四	清	水	寺	一	二	乙	新	入	生	の	行	軍	訓	練
五	名	和	神	社	四	〇	乙	強	行	軍				

六	手	間	村	一	八	乙	古	戦	場	探	勝			
七	幡	郷	村	二	〇	乙	耐	熱	行	軍				
八	日	野	川	一	〇	丙	石	拾	ひ					
九	大	高	村	二	五	乙	大	神	山	神	社	参	拜	
一〇	賀	野	村	三	〇	乙	古	墳	見	學				
一一	境	町		四	〇	乙	強	行	軍					
一二	和	田	村	二	五	甲	和	田	御	崎	神	社	参	拜
一	成	實	村	一	五	甲	耐	寒	行	軍	(山	路)		
二	彦	名	村	一	〇	甲	ス	キ	一	訓	練			
三				一										

(備考) 服装「甲」とあるは甲装の事にて背籠に外套を付け、武装せる正装なり。乙装とは平常通學の服装にして外套

を着けない武裝をいふ。丙裝は略裝にして背囊は負はない。

(11) 劍道



古 稽 地 (六) 眞寫

この學校の劍道史も亦古い。昭和三年劍友會を創設して以來十四年、益々その基礎を鞏固にし、内容を充實して今日に至つた。學校として備へてゐる防具七十組があり、毎週火曜の放課後百二十名の會員が「エイ」「ヤア」の掛聲勇ましく道場一ぱいに心身を鍛錬する。嚴肅な拍子木が校舎内に響き渡れば、防具に身を固めた百餘名の會員が肅々と道場に參集する。修行は神前の禮拜に始まり、心得綱領の唱和、劍道讀本講話、劍道型、地稽古等があつて終る。夏季休暇及冬季休暇の心身鍛錬期間には土用稽古並に寒稽古を行ひ、その最終日には納會試合を行ふ。指導には落合訓導を初めこの學校の先生が數名當つてこゝにも師弟混然一如の姿に於て、魂と魂の相搏つ崇高なる情景を見る事が出来る。

劍道心得綱領

自覺 我等ハ日本男子ナリ
信仰 我等ハ皇室ヲ中心トナス
正義 我等ハ正義ヲ尊ヒ名譽ヲ重ンス

鍛錬 我等ハ體力ヲ鍊リ勇敢事ニ當ル
奉仕 我等ハ進ンテ人ノ爲世ノ爲ニ盡ス

この心得綱領に見る如く、日本人としての自覺即ち民族自覺の精神に根ざし、皇室中心即ち天皇歸一の信仰に立つて身體を鍛錬し、正義を尊び、名譽を重んじ、職域奉公の誠を捧げることとを信條としてゐる。世の中を提げ進む精神の精神が振りかぶる一太刀一太刀に籠められてゐるのである。最近小學校武道の必要性は頓に高調せられ、國民學校に於ては體鍊科武道が正科として特に重要視されてゐる。角盤校が夙にその必要性を高度に認識して、昭和三年より劍友會を組織し、學童に劍道の修行を積ませてゐることは確かに地方に於ける一異彩であり、教練と共に十數年前より昭和維新の國民教育の動向を示唆してゐたかの感がある。その綱領に曰く

劍道綱領

- 第一條 忠君愛國ノ大義ハ武道ノ本領ナリ武道ヲ講究スル者ハ平素心身ヲ鍛錬シ義勇奉公ノ修養ヲ忘ルヘカラス
- 第二條 禮儀ヲ重シ決シテ驕慢卑劣ノ行アルヘカラス
- 第三條 名譽ト廉恥トハ武士ノ生命ナリ斯道ニ志ス者ハ苟モ表裏背信ノ行爲アルヘカラス
- 第四條 恭敬慈愛ヲ重シ決シテ長ヲ凌キ少ヲ侮リ劍ヲ知ラサル人ヲ蔑ニシ名ヲ爭ヒ譽ヲ競フヘカラス
- 第五條 平和ヲ行トシ努メテ争心ヲ去リ口論私闘ノ行アルヘカラス
- 第六條 質素ハ剛健ノ源ニシテ淨華ハ懦弱ノ本ナリ力メテ輕佻浮靡ノ行ヲ戒ムヘシ
- 第七條 兵ハ凶器ナリ之ヲ義ニ用フレハ武ノ徳トナリ之ヲ不義ニ用フレハ武ノ暴トナル
- 第八條 師長ニ對シテハ尤モ常ニ敬意ヲ盡スヘシ其ノ教ヲ奉シ其ノ命ニ遵ヒ來テ規律節制ノ習ヲ養フヘシ
- 第九條 忠孝ハ皇國ノ精華ニシテ治ニ居テ亂ヲ忘レサルハ古人ノ訓ナリ劍道ヲ講究スル者ハ右ノ條々ヲ遵奉シ以テ國

(12) 國旗掲揚訓練

國旗の掲揚は總て喇叭の合圖による。「氣を付け」の喇叭が二回繰返して吹奏されると、職員児童何處にあつても、その在所に於て國旗掲揚臺の方向に面し直立不動の姿勢をとる。その場合國旗が見える見えないは問題ではない。唯眞心を以て國旗を尊敬するといふ態度を養ふ事に重點を置いて居るからである。さしも騒がしかつた校内が水を打つた様に静まりかへり、咳拂ひ一つしない。次いで「國の鎮め」が吹奏されると、國旗は訓練部員の手によつて竿頭高く掲揚されるのである。「休め」の喇叭で掲揚は終る事になり、元の状態にかへる。國旗掲揚はこの形式によるばかりでなく國旗掲揚臺の下に集り、いとも莊嚴に實施される場合もある。之を國旗掲揚式としてゐる。

(13) 非常呼集訓練

非常呼集の合圖は喇叭による。各校舎中央廊下の定められた場所に於て集合喇叭が吹奏されると、何時如何なる場合でも直ちに武裝して校庭に集合する。集合の心得

- 一、無言であること
- 二、走らないこと
- 三、落着くこと
- 四、注意深くあること

集合隊形は中隊縦隊である。そして集合は點呼を以て終る。凡そこの時間が五分間である。國民體位の向上を目指し

歩くことを鍛練してゐる角盤校では、第三時限頃から非常呼集によつて全員を校庭に集合させ、行軍に出掛ける場合もある。合同教練を實施する時などもこの非常呼集によつて短時間に集合を終る。児童もよく訓練されてゐて、慌てず騒がずしかも敏速に服裝を整へて所定の位置に集合する。

(14) 日本體操

皇國精神の表現であり、發現である日本體操が、大正の末期既に實修されたといふ歴史を持つこの學校は、飽くまでも日本教育の殿堂であるとも言へる。その後一時中止の形であるが、昭和十三年、現大西校長が自ら實修解説に當り、職員から児童へと傳達されて、遂に繼續的に實修する事となつたものである。今や七百の健兒は「ひ、ふ、み、よ……」の呼稱も勇ましく、佐藤拓植教育部長直接指導の下に元氣潑刺、この心身一如の體育を實施して、民族意識を彌が上にも高揚し、皇國精神の體認につとめてゐる。

夏季及び冬季の心身鍛練期間には、早朝に児童を集め、點呼禮拜に次いで日本體操を實修し、終つて駈足をする。これを早曉訓練と稱してゐる。「天晴れ、おけ「彌榮」の奉唱をする頃、角盤山の麓に朝日を拜んで神代そのまゝの感に打たれる幸福な健兒等を憶ふ。

(15) 拓植室の經營

この學校の拓植室は職業指導室を兼ねて、この二つが實に仲よく手を繋



操體本日(七)眞寫



室 植 拓 (八眞寫)

ぎ合つてゐる。この部屋には卒業前児童の進路に正しい指針を與へることを目的として、児童達が自由に研究出来るやう開放されてゐる。卒業前児童達は室内に展覧されてゐる参考品や圖表を觀て興味の血をたぎらせるのである。そこには拓植部長、職業指導部長の各訓導が居り、一々懇切に説明して児童の質問に答へてゐる。この室は児童にとつて拓植の特別教室であるばかりでなく、父兄母姉に對して滿蒙開拓の重要性なり、拓士の本質を理解させるに最もよい教室でもある。それが職業指導室を兼ねてゐる關係上、拓士志願の適切な指導が出来るばかりでなく、最も理想的に選職の指導が出来るわけである。職業指導室と拓植室を兼ねるといふ事は經費やその他の諸關係から止むを得ずやつた事ではあらうが、それが却つて効果的に見受けられる。

四、角盤小隊編成送出まで

(1) 一校一箇小隊編成送出への念願

義勇軍志願者の増加は拓植教育徹底の結果として現はれる事象でなくてはならない。拓植教育が徹底すれば東亞開拓の必要性を認識することになり、大陸發展の雄圖に燃ゆる青少年が育成され、隨つて義勇軍志願者の増加を見ることは必然である。

角盤校は昭和十三年國策義勇軍制度創設の年に四名、翌十四年に五名の義勇軍を出してゐるに過ぎない。然るに昭和十五年三月には郷土中隊編成送出の企てがあり、各縣ともにこの運動に努力したのである。この學校に於ても、校長大西孟信氏は西伯教育會の拓植部長に推され、その中核となつて義勇軍送出に奔走、一方拓植教育の必要を説いて部下訓導を指導誘掖した結果、角盤校だけで二十八名といふ飛躍的數字を示し、一躍縣下に義勇軍學校角盤あり、拓植教育者大西ありの名を擢にしたのである。爾來同校長の念願は「角盤小隊編成送出」といふ一事であつた。嘗つては靜岡縣富士郡小學校長會が一郡一箇小隊編成送出の計畫を樹立し、終に昭和十四年三月富士小隊を編成して、全國の啓蒙運動とはなつたのである。

「昭和十六年三月卒業すべき児童三百餘名の中から約二割に當る六十名の義勇軍を送出することは決して不可能な事ではない。要は拓植教育を徹底させるにある」との大西校長の鐵の如き信念の下に系統的な指導が施され、且は特殊な施設も計畫されたのである。かくして義勇軍角盤小隊編成送出に對つて全職員の敢闘が續けられた。

(2) 拓植教育への拍車と教師の努力

児童將來の進路を決定する二大中心勢力とも言ふべきものを考へるならば、それは學校の教師であり、家庭の父母である。然しながら児童本人の決心といふものも亦如何なる勢力をも退ける絶對の勢力である事を忘れてはならない。十數年間の手しほにかけたといふ兒を大陸の滿洲に送るといふことは、理解なき親の到底許さないことである。功利的個人主義的外來思想に幻惑されて、神ながらの精神を没却せる父兄母姉の出来る事ではない。生活様式を如何程新體制らし、轉換したとしても、觀念の轉換がなければ、公益優先道實踐の實生活になるものではない。そこには思想的に全

く舊體制を脱皮した觀念の轉回が要請されてゐることを記憶すべきである。

義勇軍の送出に當つても、父兄母姉に理解せざる爲、折角養はれた滿洲開拓の雄圖が挫かれ、出發間際に取消を願ひ出る者の續出を見たりする。けれども父兄母姉に對する直接的指導は仲々困難であるから、兒童を通じて無理解なる父兄の啓蒙運動をすることが肝要である。

この學校では此處に着目し、要は拓植教育の徹底によつて兒童の滿洲開拓熱を煽り、その兒童の熱望が遂に父兄母姉を動かして義勇軍に志願するといふ方法を選ぶことが必要であるとなし、茲に拓植教育への拍車はかけられ、義勇軍送出への教師の努力が層一層加へられる事となつたのである。

三百に餘る二年生は八箇學級に編制されて居り、各學級七人の義勇軍を出さなければ小隊編成は不可能である。或一訓導が非常に熱心であつて、十數名参加せしめたとしても、他の訓導が不熱心であればその目的を達することは出來ない。實に文字通り全職員が校長と一心同體になり、父兄母姉の誤解解除の爲家庭訪問をなし、或は各校下の集會に臨んで滿洲開拓の重要性を説き、或は父兄を學校に招いて義勇軍の本質を話す等、義勇軍角盤小隊送出の爲に献身的な努力が拂はれたのである。

「至誠にして動かさざるものは未だこれ非るなり」との信念を以て、日曜といはず、祭日といはず、時には夜を徹して義勇軍送出への敢闘は續けられたのである。而して十一月に入り、約九十名の希望兒童中五十四名の志願確定者を得た爲、角盤小隊送出實現の曙光を認め、之に志願不確定の六名を加へて六十名に對し昭和十五年十二月に角盤小隊拓植訓練を実施したものである。

(3) 角盤小隊短期拓植訓練

角盤小隊の拓植訓練は鳥取縣拓植教育研究會委託研究會が昭和十五年十二月五日同六日の兩日同校に於て開催せられたる際、その前三日間に實施されたもので、縣の拓植教育研究會の研究材料ともなり、拓植教育振興上貴重な資料ともなつたものである。拓植訓練としては最も短期なものであるが、これは訓練生の大部分が嘗つて西伯教育會主催の拓植訓練を受けた既訓練者であつた關係と經費との關係によるものである。

(一)期 自昭和十五年十二月二日至同 月五日 三泊四日

(二)趣 旨 昭和十六年三月送出すべき滿蒙開拓青少年義勇軍の角盤小隊を編成する目的を以て義勇軍志願者に對し

大東亞建設の認識を附與すると共に滿蒙開拓の重大使命を自覺せしめんとす

(三)講 師

- 鳥取縣視學 木村 正義 先生
- 鳥取縣拓務主事補 大鹽 憲二 先生
- 鳥取縣社會課拓務係 松尾 壽之 先生
- 角盤高等小學校長 大西 孟信 先生

(四)職 員

- | | | |
|---------|-----|-------|
| 所 長 | 校 長 | 大西 孟信 |
| 副 所 長 | 訓 導 | 米澤 繁俊 |
| 總 務 部 長 | 同 | 小田 顯義 |
| 本 部 員 | 同 | 長尾 四郎 |
| | 同 | 吉村 泰之 |

日四第 (木五三)	日三第 (水四三)	日二第 (火三三)	日一第 (月二三)	
				5
面洗床起	面洗床起	面洗床起		5.30
呼揚點 揚旗國 拜禮	呼揚點 揚旗國 拜禮	呼揚點 揚旗國 拜禮		9
食朝	食朝	食朝		7
學(西大)	事(崎山)	學(村木)		8
學(西大)	事(崎山)	學(村木)	付受合集	9
掃清內舍 列分兵閱	學(尾松)	練(藤遠)	式所開	10
式會所茶 隊話解	學(尾松)	操體本	意注導指	11
食	食	食	食	12
	道(合落)	學(鹽大)	操體本日	1
	操體本日	學(鹽大)	道(合落)	2
	練(藤遠)	藤(合落)	事(崎山)	3
	浴入	浴入	浴入	4
	食夕	食夕	食夕	5
	歌(尾龜)	歌(尾龜)	歌(尾龜)	6
	畫映	文問(長隊小各)	會談座	7
	畫映	文問(長隊小各)	會話茶	8
	呼點	呼點	呼點	9
	燈消	燈消	燈消	9.30

(六) 日程

看 受 準 茶
護 付 係 備 話
係 係 係 係 會

學校看護婦
須池松桑
田本本垣
キ惠延太
ヨ治榮助

(五) 係員

座談會	映畫	問食	經理	際寫印	入浴係、記錄文書係	電燈係、寫真係	來賓係、寢具係	炊事	農事指導員	教練同	唱歌同	武同指導員	日本體操指導員	第三小隊長	第二小隊長	第一小隊長
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
青山弘	宇田洋	小田顯	長尾四郎	川村謙藏	落合寬	鈴木實	吉村泰之	米澤繁俊	山崎巖	遠藤眞人	龜尾正	落合寬	佐藤茂雄	遠藤眞人	宇田洋	佐藤茂雄

- (七) 小隊編成
- | | | | |
|------|-----|-----|------|
| 第一小隊 | 二〇名 | 小隊長 | 佐藤茂雄 |
| 第二小隊 | 二〇名 | 同 | 宇田洋 |
| 第三小隊 | 二〇名 | 同 | 遠藤眞人 |

(八) 時間配當

日	科		許	第四日	第三日	第二日	第一日	計
	教學	教練						
教學	1	1	8	2	2	4	1	6
教練	1	1	2	1	1	1	1	0
武道	1	1	3	1	1	1	1	0
體操	1	1	3	1	1	1	1	0
唱歌	1	1	3	1	1	1	1	0
農事	1	1	3	1	2	1	1	0
座談	1	1	3	1	1	2	1	0
映畫	1	1	2	1	2	1	1	0
其他	1	1	3	2	1	1	1	0
計			30	4	10	10	6	

(九) 講師指導題目

報徳道と義勇軍 木村正義先生
 本縣に於ける義勇軍 大鹽憲二先生
 未墾の沃野我を待つ 松尾壽之先生

(一〇) 農事指導計畫並に要領

現地に於ける郷土中隊 大西孟信先生
 滿蒙青少年義勇軍角盤小隊植植訓練指導計畫並に實施表 農事指導員 山崎 巖
 方針 農事の野外作業により開拓者たるの性格と農民魂の基礎的鍊成を徹底せしむると共に體力の向上を圖る
 計畫

作業種目	耕地段別	参加人員	時間	用具	備考
麥ノ除草中耕肥	四段	六〇	三	鋤 三〇	小隊長指揮小隊別途中行進

要領 小隊別交互に麥の施肥と除草中耕をなさしむ

作業順序	要領
集訓	小隊別運動場各自農具携帯 點檢(人員服裝農具健否)
行進	指導者 開拓者ト農事 全隊
現地作業	各小隊長指揮 學校―農場 駆足 小隊別 作業ハ小隊別ニ小隊長指揮ノモトニ實施ス 1、整列點檢(人員服裝農具健否) 1、作業要領及注意―目的指示、示範、各自試習、批正

備考	行進	講評	反省	解散
作業種目ハ都合ニ依リ變更スルモ、作業順序ノ大項ニハ變更ナシ	3、現地作業開始—巡視、批正、健否及精神状態、重範 4、現地作業終了—集合、點檢（人員、服裝、農具、健否） 各小隊長指導指揮—農場ヨリ學校—駐足 小隊別全員集合—運動場 點檢（人員服裝農具健否状態） 指導者—作業中ニ於ケル感想ニ就イテ 小隊長ノ講評及注意—身體ノ清浄ヲナサシム 互禮			

(一) 教練指導計畫並要領

月	日	時間	指導事項	場所	豫定時間
	第二日	一〇—一二時	一、不動ノ姿勢 二、右（左）向、後向〔停止間〕 三、速歩行進 四、敬礼 五、2部隊敬礼 六、折敷伏七〔停止及行進間〕 七、折敷伏七〔停止及行進間〕 八、横隊行進 九、各個人ノ敬礼 十、其他ノ事項 十一、諸動作	運動場	五〇分

(二) 献立表

備考	第三日	午後	三—四時	一、密集教練 二、執銃各個教練 三、1銃ノ操法—保持法、捧銃、立銃、擔銃 四、2速歩行進 五、3銃劍術基本動作	運動場	五〇分
天候ニヨリ指導事項及場所ノ一部ヲ變更スルコトアリ						

日次	朝	晝	晩
第一日	第二日	第三日	第四日
献立	村料	献立	村料
小麦飯、味噌汁、揚げ豆腐、味噌汁、煮昆布、煮大根、煮肉、大根、白菜、豆腐、白菜、煮魚、煮和飯、煮豆、煮菜	小麦飯、味噌汁、揚げ豆腐、味噌汁、煮昆布、煮大根、煮肉、大根、白菜、豆腐、白菜、煮魚、煮和飯、煮豆、煮菜	小麦飯、味噌汁、揚げ豆腐、味噌汁、煮昆布、煮大根、煮肉、大根、白菜、豆腐、白菜、煮魚、煮和飯、煮豆、煮菜	小麦飯、味噌汁、揚げ豆腐、味噌汁、煮昆布、煮大根、煮肉、大根、白菜、豆腐、白菜、煮魚、煮和飯、煮豆、煮菜

(三) 開所、式次並閉所式次

開所式次

一、部隊編成

- 1、訓練生入場〔小隊長指揮〕
- 2、來賓臨席〔所長先導〕
- 3、敬禮〔總務部長指揮〕
- 4、任命〔所長小隊長指揮〕
- 5、挨拶〔總務部長〕
- 二、敬禮〔小隊長指揮〕
- 三、國旗揭揚〔小隊長指揮、喇叭一回〕
- 四、宮城遙拜〔小隊長指揮〕〔喇叭一回唱歌指導員指揮〕
- 五、默禱〔小隊長指揮〕
- 六、開式之辭〔總務部長〕
- 七、國歌齊唱〔唱歌指導員指揮〕
- 八、勅語奉讀〔本部員〕
- 九、勅語奉讀〔所長〕
- 一〇、奉答唱歌〔唱歌指導員指揮〕
- 一一、勅語撤還〔本部員〕
- 一二、所長式辭〔小隊長指揮〕〔鼓隊終始一回、唱歌指導員指揮〕

- 一三、來賓祝辭〔小隊長指揮〕〔鼓隊終始一回、唱歌指導員指揮〕
- 一四、義勇軍綱領齊誦〔所長〕
- 一五、宣誓〔訓練生代表〕
- 一六、閉式之辭〔總務部長〕
- 一七、敬禮〔小隊長指揮〕
- 一八、來賓退場〔所長先導〕
- 一九、訓練生退場〔小隊長指導〕

閉所式次

- 一、訓練生入場〔小隊長指揮〕
- 二、來賓臨席〔所長先導〕
- 三、敬禮〔小隊長指揮〕
- 四、國旗揭揚〔小隊長指揮〕〔喇叭一回〕
- 五、宮城遙拜〔小隊長指揮〕〔喇叭一回、唱歌指導員指揮〕
- 六、默禱〔小隊長指揮〕
- 七、開式之挨拶〔總務部長〕
- 八、國歌齊唱〔唱歌指導員〕
- 九、勅語奉讀〔本部員〕
- 一〇、勅語奉讀〔所長〕

- 一一、奉答唱歌〔唱歌指導員〕
- 一二、勅語敬進〔本部員〕
- 一三、修了證授與〔所長〕〔小隊長指揮〕〔鼓隊始一回唱歌指導員指揮〕
- 一四、所長式辭〔小隊長指揮〕〔鼓隊終一回唱歌指導員指揮〕
- 一五、來賓祝辭〔小隊長指揮〕〔鼓隊終始一回唱歌指導員指揮〕
- 一六、義勇軍綱領齊誦〔所長〕
- 一七、謝辭〔訓練生代表〕
- 一八、植民之歌〔唱歌指導員〕
- 一八、彌榮奉唱〔所長〕〔鼓隊終始一回、唱歌指導員指揮〕
- 二〇、閉式之挨拶〔總務部長〕
- 二一、敬禮〔小隊長指揮〕
- 二二、小隊解除
- 1、挨拶
- 2、解隊
- 3、挨拶
- 4、敬禮
- 二三、來賓退場〔所長先導〕
- 二四、訓練生退場〔小隊長指揮〕



床起 (九頁寫)

奏する起床喇叭の音に、六十の訓練生は希望に満ちて活動の喜びを胸に波打たせながら床を蹴つて起き上る。直ちに寢具の整頓洗面を終へて朝の點呼禮拜にかゝる。點呼禮拜等の指揮は第一小隊長が中隊長代理として之に當つたのである。

△朝の點呼禮拜の形式

- 集合整列點呼
- 二拜二拍手一拜
- 國旗掲揚(君が代二唱)
- 勅語奉讀

(一四) 生活訓練の實際

生活訓練の實際に直接當つたところの小隊長が何れも内原訓練所に於て教員拓植訓練を受けた者ばかりであり、訓練生も亦殆んど二度目の短期訓練を受けるのであり、又退出を前にした志望確實な訓練生でもあつた爲、その實際が内原教育の豫備訓練といふ形になつた事は否めない事實であつた。東の空白む午前五時三十分。所長自ら打出す大太鼓と、訓練生の吹



操體本日並拜禮の朝 (十頁寫)

天晴れ。おけ(複唱)

義勇軍綱領(複唱)

天皇陛下彌榮(複唱)

二拜二拍手一拜

朝の挨拶(お早うございます)

終つて直ちに日本體操の實修に移る。日本體操は訓練生全部がその動作と順序を記憶してゐた關係上、略式でなく、正式を實修し、終ると神社參拜の跣足をする。一汗かいて跣足を終れば美味しい朝の食事である。

△食事の作法形式

着席

みたましづめ

(この間に神ながらの心を複唱する)

「戴きます」

食事終つて

「戴きました」

退席

次いで學科・教練・體操・作業と、一日の定められた日課を終れば、午後の四時過には夕の禮拜が校庭で行はれる。

△夕の禮拜の形式



ひ 洗 器 食 (一十眞寫)

集合整列

二拜二拍手

天晴れ……おけ

二拍手一拜

夕の挨拶(御苦勞様でした)

解散

夕の禮拜が終ると巻脚絆を解き、入浴係の先生に引率されて入浴に行く。入浴は訓練生にとって大變楽しい時である。入浴から歸ると夕食の準備が出来て居り、一齊に食事にかゝる。食事後は唱歌の時間となり、唱歌室で開拓歌の練習をする。それから或は座談會、映畫の夕となつて訓練生にとつて最も愉しい時である。夜の點呼禮拜がすむと、全訓練生は寢床にもぐり込み、消燈の合圖と共にぐつすりと寢入るのである。

△夜の點呼禮拜の形式

集合整列

點呼

みたましづめ

二拜二拍手一拜

挨拶(お休みなさい)

解散

この訓練期間中に於て、最も美はしい情景を描き出した場面は何といつても炊事場である。この學校には女先生が一



動活の班事炊 (二十頁寫)

にして久し振りに我が家へと向つた。

修了證書

(氏名)

人も居ない。従つて僅か養護訓導一名の手傳ひで、男先生の奮闘も涙ぐましかつたのであるが、この事を知つて居る校長の奥様を始め各訓導の奥様は之が救援の爲學校に駆けつけ、朝は四時頃から晩は八時頃まで、甲斐々々しく訓練生達の爲に奮闘したのである。その家庭的團樂と一圓融合の姿はよく親和の道を盡して居るものであり、和魂の神ながらの精神を顯現してゐるものと言はねばならぬ。

かくして三泊四日の短期訓練は、親切と感謝、師弟相思相愛の極めてなごやかな家庭的團樂の裡に、多くの感激と希望を包んで幕を閉ぢ受訓練生六十名はそれ修了證書を手



與授證了修 (三十頁寫)

右者本校主催滿蒙開拓青少年義勇軍短期訓練所生トシテ所定ノ科程ヲ修了セシコトヲ證ス

期間 自昭和十五年十二月二日至十二月五日

訓練時數 三十時間

昭和十五年十二月五日

角盤小隊短期拓植訓練所長

鳥取縣米子市角盤高等小學校長

從七位 大 西 孟 信 印
勳八等

(4) 角盤小隊の編成

斯うして拓植短期訓練は終了したものの、之等の受訓練生が全部揃つて義勇軍に参加するものとも思はれない。その後にはける指導の重要な事は論を俟たない。即ち不斷の努力が要請せられ、苟めにも放任は許されない。種々な誘惑がある。義勇軍の逆宣傳もある。卒業期が近づくにつれて、就職の事、上級學校への入學志願の事など、童心を迷はせるやうな事象は數多くある。それ等の誘惑や迷ひを拂拭して、本來の志望に復歸せしめる事は、主として擔任教師と拓植部長がせねばならぬ。兎にも角にもこの學校が拓植訓練實施の際の志望數に餘りの變動を見せず、結局五十三名の義勇軍を内原に入所せしめた事は確かに賞讃に價する努力があつたに違ひない。

大西校長の一枚一箇小隊編成送出の念願は茲に達せられて、角盤拓植教育上劃期的大事業を完遂し、校史の上に一大金字塔を築いたといふべきである。「有る」のは偶然にあるのではない。「有らしめ」たのである。嘗つては四名五名しか義勇軍志願者のなかつた角盤校に、昨年三月二十八名、今年三月五十三名と、多數の志願者を見るに至つたその蔭に、否その根柢に、角盤拓植教育の實際を彷彿せしめることが出来、その又奥に「有らしめた」ところの教師の努力を

見ることが出来るのである。「往け八紘を宇とし」唯言葉として唱へさせるは易い。然しながら之を實行する人たらしめるは難い。

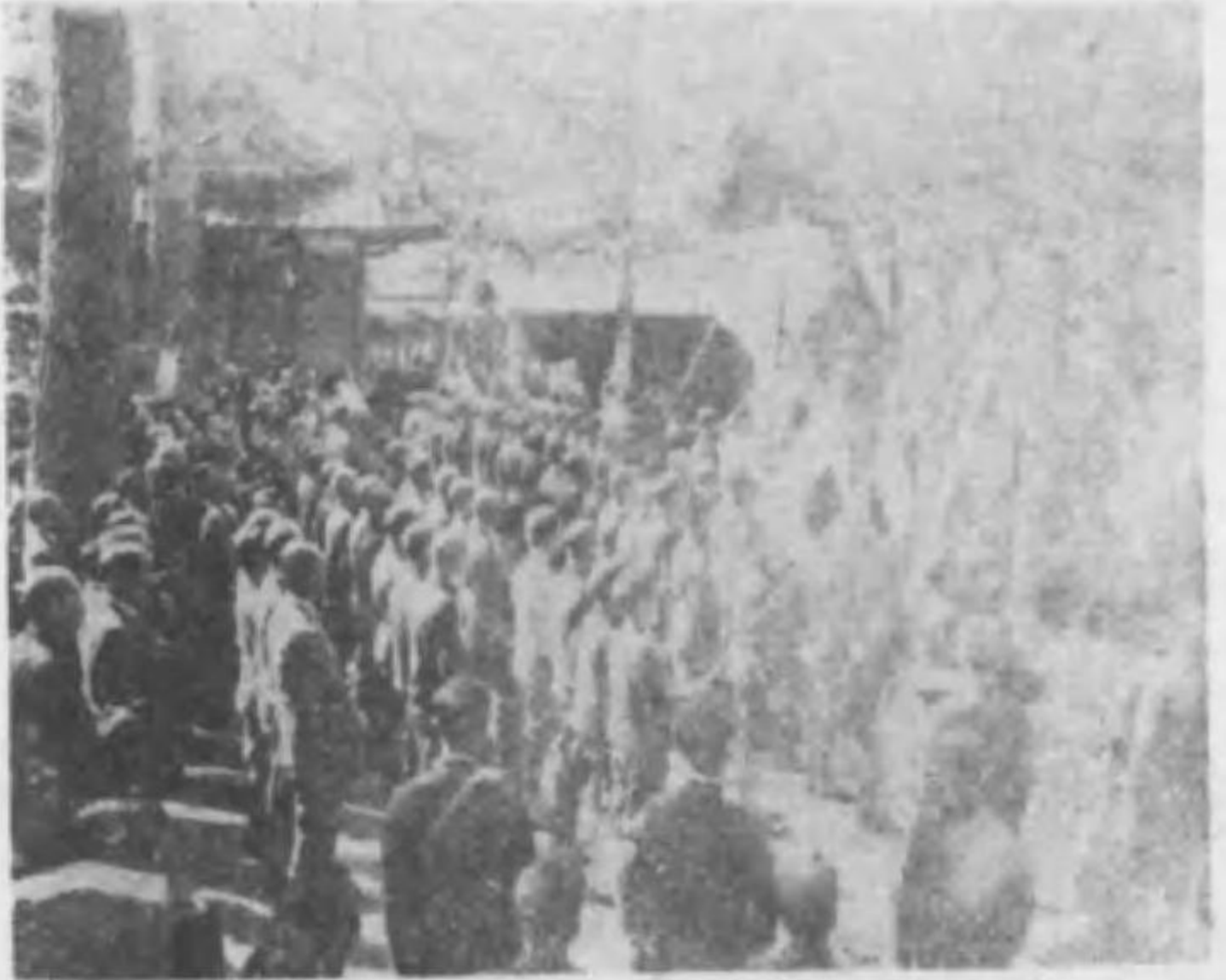
(5) 角盤小隊の内原入所

(一) 各種團體共同主催の祈願祭並壯行會



式行壯 (四十眞寫)

鳥取郷土中隊の鳥取出發が三月十五日、内原入所が三月十六日と決定すると、縣の諸行事の關係上角盤小隊の米子出發は其の前日の三月十四日午前九時十八分の上り列車といふ事に決定した。従つて角盤小隊の祈願祭並に壯行會は三月十三日の午後角盤校友會、西伯教育會第一學校組合會、米子市青年團共同主催の下に舉行することとなし、日程を定めそれによつて極めて嚴肅と感激の裡に諸行事を終つたのである。西尾米子市長の畫と激勵の辭は市廳舎バルコニーで、佐々木市視學並に市會議員列席の下に受けたの



祭願祈隊小盤角 (五十眞寫)

である。終つて角盤喇叭鼓隊を先頭に市中行進を行ひ隊員が最後の一夜の夢を結ぶ各自の家に歸つたのは暮方近くであつた。

祈願祭及壯行式

- 午後一時……勝田神社祈願祭
- 午後二時……米子市壯行式
- 午後三時……壯行式
- 集合 整列
- 國旗 掲揚
- 宮城 造拜
- 勅語奉讀……友松組合長
- 綱領……大西校長
- 式辭……友松組合長
- 祝辭……佐々木市視學
- 謝辭……義勇軍代表
- 彌榮三唱……友松組合長
- 閲章 分列
- 解散

(二) 角盤小隊の郷土米子市出發

郷土と我が家に最後の一夜の夢を結んだ角盤小隊員五十三名は十四日午前七時三十分母校校庭に集合の上人員點呼を受けて小隊を編成、訓導遠藤小隊長指揮の下に午前八時日滿兩國旗を先頭に續いて角盤喇叭鼓隊、内原迄隊員を見送る大西校長、隊員の順で二歳の長き歲月偕に學び偕に遊び偕にへた校舎と運動場に愈々別れを告げて、校門を出た。沿道は小雨降る中に、いと我が子を送る親、行を壯ならしめんとして見送る



米子驛に向ふ (十二頁寫)

一般市民、各中小學校男女生徒兒童の中を中央線通りより市役所前を通り抜け米子驛に到着する。見送人で埋まる驛前廣場に於て第一學校組合會長の告別激勵の辭に次ぎ、大西教育會拓植部長から日滿兩國旗の授與を受け、隊員代表が「我等隊員は心を一にして滿洲建國の聖業に身命を捧げん」との決意を示せる誓詞を述べた後一旦解散をなし父兄母姉と驛頭に於ける最後の別れを交した。午前九時集合、人員點呼、ブラット入場、午前九時十五分乗車、見送人の萬歳裡に九時十九分發車、隊員は車中から擧手の答禮の儘鳥取に向つた。隊員にも、見送る父兄母姉にも理屈なしの涙、我が子いとしの情の涙か、壯行の感激より受ける涙か、眞に胸底を打つ感激裡に郷土米子市を後に列車は東へ東へと轟進を續けた。列車が淀江驛に着いた時向ふ側には軍隊の臨時列車が着いてゐた。隊員が總立ちになつて喜ぶと「しつかりやれ、滿洲の地で會はう。」と兵隊さんが激勵の言葉を贈れば、角盤小隊員も口を揃へて「兵隊さんお元氣で、僕等も後から行きませう。」と交す感激の言葉は非常時日本を背負つて陣頭に立つ若人の強い言葉であつた。

滿蒙開拓青少年
義勇軍 軍角盤小隊送出市中行進及告別式
一、期 日 三月十四日
二、次 第

- 午前七時三十分……角盤校庭集合整列人員點呼
- 午前八時……校庭出發市中行進
- 午前八時二十分……米子驛到着
- 午前八時三十分……告別式
- 敬禮
- 告別激勵の辭 (友松組合會長)
- 日滿國旗授與 (大西拓植部長)
- 謝辭 (義勇軍代表)
- 喇叭鼓隊 (實實剛健) 吹奏
- 義勇軍 萬歳
- 敬禮
- 午前九時……ブラット整列
- (整列中見送人愛國行進曲齊唱)
- 午前九時十五分……謝辭
- 午前九時十八分……義勇軍の萬歳三唱

午前九時十九分……發 車

義勇軍擧手敬禮

義勇軍の萬歳三唱（見送人）

(三) 縣主催の壯行會

午前十一時三十分鳥取驛に到着、驛前で西伯小隊員六十六名と角盤少隊員五十三名が二箇小隊となり、教育會から受けた日滿國旗を先頭に、此所まで見送つて来た角盤喇叭鼓隊、それに續いて大西西伯教育會拓植部長、角盤小隊、西伯小隊の順に縣廳に向つた。沿道は歓迎の人、見送る人で埋まる程の送迎ぶりであつた。

縣廳前の廣場に着くと、出迎への高田主務課長に人員報告をなし、直ちに縣會議事堂の縣主催壯行會に臨み、知事閣下の訓辭、記念品の授受、聯隊長司令官縣會議議長送出學校長代表等の祝辭があつた上、隊員は久松山下鳥取公設運動場に向つた。此所で郷土中隊四百十四名の記念撮影をなしたる上、知事代理高田主務課長の閱兵分列を終つて市中行進をなし、宿舎たる公會室に到つた。

午後七時になると國防婦人會員の心からなる夕食の膳に向ひ、「今晚は御馳走だぞ。」と、父母の膝下を離れた隊員とは思へぬ程明朗さを見せて食事を終り、懐しい故郷の父母の許近親者友人へ旅立ちの第一報を書送る者が多かつた。そして「さあ今日から因伯四百の健兒は皆兄弟だぞ。」と實に朗らかな情景を展開した。

(四) 鳥取中隊の郷土鳥取市出發

三月十五日午前六時起床、洗面、朝食を終ると、午前七時三十分集合喇叭が鳴響けば隊員は公會堂前廣場に整列、各小隊別に人員點呼をなし大西引率中隊長に人員報告、縣社長田神社の縣主催祈願祭に臨み、終つて隊伍堂々鳥取驛に向ひ、驛頭で高田主務課長及各代表者の激勵の辭を受けた上、臨時列車六輛に隊員四百十四名は分乗した。やがて發車の

ベルが鳴ると見送人の怒濤の如き萬歳の歡聲がわき上り感激と熱意に燃ゆる車中の若人達の顔は一段と緊張を示したが汽笛一聲列車は一路東上した。

(五) 隊員の東上

希望に燃ゆる因伯健兒四百十四名を乗せた列車が米原に着くと窓口から百姓姿の小柄な年の頃五十五六の男の一人が

列車の到着を待ちかねて居た様に走り寄つて来て「しつかりやつて下さいこれは心からの贈物です。どうかお受け下さい。」と言つて僅かな停車時間の間に各輛に贈つたのは、猫柳に短冊を附けた花の贈物であつた。其の短冊を見ると

△日本は昔ながらの神の國

正しく歩め忠孝の道

△何事も誠一つの外はなし

億兆一心護れ日の本

△眞心のかぎり捧げて聖職の

幸を祈れよ一億の民

△忠孝の道一筋に歩むこそ

神の教へを守るなりけり



上 東 の 員 隊 (七十眞寫)

△日本はいく久しくも菊薫る

尊き御稜威仰ぐ國民

△限りある命捧げて限りなき

國の御恩に報いまつらん

等の和歌が書き入れてあつた。午後十時頃から隊員は列車内の一夜に夢を結ぶ者が出来て、十二時頃には皆揃つて安かに休んだ。大西引率中隊長に抱かれて夢を結んで居る隊員の一人もあつた。偉大なる滿洲建國の聖業に身命を捧げんと決意して東上する因伯健兒の一人、唯神のみ知る健兒の將來に幸あれよと祈ると共に、夢の間にも我が日本民族の先驅者としての名を汚す勿れ、皇道精神の宣揚と國威の伸長こそは眞に身を挺してお前が爲し遂げなければならぬ日本青少年に課せられた重大使命だと念じて止まぬものがある様でもあつた。

(六) 内原 到 窟

三月十六日午前十一時過内原驛に著くと、訓練所からは森本鳥取中隊長以下全幹部が出迎へて呉れたので、ブラットで簡単な挨拶が交された。隊員は驛前廣場に整列、人員點呼を終ると隊伍堂々訓練所に向つた。驛頭で交された大鹽拓務主事補並大西引率中隊長と、今後の責任を引受ける森本鳥取中隊長との挨拶は極めて簡單ではあつたが深刻なものであつた。訓練所の衛兵所前に到ると小林鳥取縣學務部長も此處で喜んで迎へた。大隊本部前で隊員名簿と氏名との點檢を終り、大隊長の挨拶、森本中隊長の挨拶等があつて一旦兵舎に落着いた上晝食を終り、少憩の後午後は内原驛からの荷物運搬をなし、夕食後は故郷への便りを書いたり、貴重品を預けて訓練所の第一夜の夢を結んだ。



内原訓練所 (八十眞寫)

(七) 身體檢査に全員合格

三月十七日は森本中隊長の親心から起床を三十分遅らせて、隊員をぐつすりとは休ませ、午前七時起床、朝の諸行事を終つて朝食を済ませた後、全員打揃つて身體檢査を受ける爲に檢査場に行つた。此處の身體檢査は極めて嚴重な檢査で、故障のある者は即日歸郷を命ずる場合があるが、鳥取中隊長には一名の不合格者も無く、四百十四名の全員美事合格したので、大鹽拓務主事補は言ふに及ばず引率者の誰もが非常に安心して喜んだ。これで完全に入所することが出来たのであるが、これを喜んだ引率者の誰もが等しく感じた事は、途中全くの無事故で内原に到着した安堵と、此の嚴重な檢査を美事パスする様な少年を育てられた郷土の父母の苦心を思ひ、日本民族の父母として敬意を表し度い感謝の心持で胸が一杯であつた事であつた。

五、義勇隊通信

(一) 現地義勇隊便り

(一) 門岡忠義君よりの書信

謹啓 解氷の候職員生徒御一同様には益々御清福にて銃後教學の爲御盡力の事とお察し申上ます小生儀滿蒙開拓義勇隊の一員として一昨年渡滿致してより光陰矢の如く足掛三年になります、渡滿後直ちに北滿の中心地ハルビン市より三里位の地點に在るハルビン特別訓練所に入所致しまして其處で約一年昨年八月に奥地嫩江訓練所に參り、訓練を受けつゝあります近々永住地に入りますが今では此の曠漠千里の沃野の生活に次第に慣れて趣味も湧き實に痛快であります諸

先生を始め在校生諸君には此の滿洲はさぞかし住み悪いやうに思れるでせうが夏と申しましても絶えず涼しい南風を受け苦しい程の暑さを感じません酷寒といへば仲々寒いと思はれるでせうが「酷寒期注意に勝る設備なし」で餘り病人もなく餘り寒いとも思ひませんそれに防寒用具が全部支給されますので寒さの心配はありませんその他の日用品も不足なく支給されてゐます

昨今は非常に暖かく小春日和で氷が解けてゐます春近くなると段々多忙になつて行きますがそれでも青空を見清い空気を胸一杯吸ひ込んで作業を致す時全く幸福であり又歡喜そのものであります近頃の作業は燃料運搬と温床の準備でその合ひ間に農具の手入等に一生懸命であり又學科や軍事教練もやつてゐます朝七時起床より夜九時消燈迄中隊全員打つて一丸となつて進んで居ります故他事乍ら御放棄下さいませ此の下手な一文が我が愛する母校學園なる角盤校在學生諸君の義勇軍參加希望の一助にもなればと思ひペンをとりました。

我等の大道場即ち大陸新天地は尊き地にて申上げる迄もなく幾多の先輩各位が血潮を以て染めなした大犠牲的靈魂不滅の地であり又その反面には言ひ知れぬ懐しみを覺える地であります故にこの未開の新天地をば我等歟の戰士が希望に燃えて一歟一隊立派に耕し小さき自分を忘れて目的貫徹する事こそ我等青少年に天與された最も重大な使命であると思ひますであるのに何故に内地青少年は義勇軍に参加しないのか本人は希望して居るが親が反對する故出發出来ないなどは其の人の精神がしつかりして居らぬ故親が安心出来ないからだと思はれます。

在校生諸君よ都會をあこがれたり又軍需景氣に浮かされてあれを求めこれを求めるよりも奮起一番この意義ある國策に従はれんことを希望してやみません卒業後農家に留つても五反や六反の耕作ではとても自分を完成し得る事は出来ません僕の言ふ事は極端かも知れませんが千里果てなき滿蒙の開拓こそ日本青少年に與へられた大使命なのでありますすからしつかりした覺悟を持つて義勇軍に参加されんことを切に希望致します。

皆様滿蒙の新天地は我等日本青少年の理想郷であつて其の凌ぎよきことは筆舌に盡せません然し又幾多の建設途上の困難も前途に横はつてゐることは百も承知しておかねば駄目です其の人の心さへしつかりしてゐたら少し位の困難は必ず切り通されるものです。

あの故國を立つ時に日の丸の旗の波と天地に響き渡つた萬歳の聲を思ひ出す時はあの感激より以上に元氣が出て來ます實に新天地は青年の埋骨の地であります東洋平和の爲滿蒙の新天地で思ふ存分活躍致さうではありませぬか諸君よ男子と生れて此の重大使命を果すことは身に取つて此の上もない光榮であります今後一層身心を鍛鍊して初志貫徹勇往邁進する決心でありますから何卒皆様御心配のなき様尙諸先生には前途有望なる青少年に呼掛けて滿蒙開拓の戦士をどしどし送つて下さい今後ともに義勇軍參加者の多く出る事を切に希望して止みません。

時節柄諸先生並に在校生諸君の御健康を遙かに大陸の新天地よりお祈り致します亂筆を謝すと共に不明の處は御判讀の程御願ひ致します。 敬具

康徳七年三月十日記

大西角盤校長先生

角盤校職生徒一同 様

第六中隊

門

岡

忠

義

拜

(二) 平岡均君よりの書信

益々寒さが加つて参りました其の後校長先生にはお變りなく御壯健にて御執務の事と存じますお蔭様にて七日の朝無事に歸郷致しました歸郷中は色々御教訓にあづかりまして實に有難う御座いました厚くお禮を申し上げます生徒諸君に對して先生の御期待に副ふ様な話も出来ませぬ實に濟みませんでした生徒の皆様にもお詫びを申して置いて下さいお願ひ

致します。

二月の上旬大使館からの學科査閲があるので近頃は朝から晩まで講堂に集つて勉強です天氣の良い日は皆で手籠を持つて新取りですが行きがけや歸りがけに良くノロの姿を見かけます。

同じ年頃の若い者ばかりですから面白く愉快に訓練に勵んでゐます此れも皆先生のお蔭と義勇軍に参加したことを今更に一層嬉しく思つて居ります。此の間米子局消印の慰問小包を戴きましたこれは米子市の銃後奉公會から送つて下さつたものと思ひます。

歸國中市役所に西尾市長様を訪れましたがお留守でありましたのでとうとう二回ながらお目にかゝる事が出来ませんでした折角歸國致しましたのに何のお役にも立ちませんで何とも申譯がありません諸先生にも宣費申上げて下さいではこれで失禮します先生の御健康を衷心からお祈り致します。さやうなら

奉吉線取柴河青年義勇隊訓練所

平

岡

均 拜

大西校長先生

(2) 郷土隊中便り

(一) 松山和男君よりの書信

謹啓 時下酷寒の候と相成りました其の後校長先生には別段御障り御座いませつか御伺ひ申し上げます降つて小生は益々元氣旺盛にて日一日と加はる滿洲の酷寒に向ひ益々張切つて居りますから他事乍ら御放棄下さいませ

さて此の度私達の加藤中隊は大隊本部よりの命に依り渡滿以來四箇月半住み馴れた懐しの一面坡訓練所を後に三江省の勃利大訓練所へ移行して來ました早速御通知致し度思つて居りましたれど何かと多忙に取りまされ幾今日になりまし

た何卒御許し下さいませ。

私達にとつては何だか第二の入植地でもある様な氣のする此の地勃利訓練所は前は山後は平野の一面坡特別訓練所とほゞ環境は似て居りますがなだらかな丘の線まばらな林等一面坡のそれと稍々趣は異つて居ります又ずらりと規則正しく並んだ兵舎の數も一面坡よりはつと多く流石は大訓練所の威容を備へて居ります。

小生等の中隊は一面坡に在りし如く訓練所の奥の院とも申すべき所で大茄子と言ふ勃利の橋から約十三里又總本部から一里半程隔つて居ます移行に際しては小生等皆徒歩で人所致しました途中或る小高い丘に「勃利青年義勇隊奮戦の地」と書記された碑を見た時に無言の教訓を受けた様な氣がいたしました「此の俺はしつかりやるぞ」といふ校長先生から平素よく聞いて居た民族的氣魄がぐつと呼醒されました兵舎の構造は一面坡と大方向同じですがベーチカで宿舎内の暖をとつて居りました一面坡と違ひ此處では座の下に煙を通して座を温める温突で暖をとつて居ります夜眠つて居ります時以下の方からはか／＼と温くなつて來て仲々心持の良いものです。

氣候はまだよくわかりませんが地形から見ると一面坡より幾分寒いかと思はれます現在でも便り一本書くにもインクはこち／＼に凍つて居りますから先づ火にあてて氷を溶かしてから書かねばなりません又兵舎を出入するにうつつかり濡れ手で扉の把手でも握ればびつたり引ついて取れなくなりそうですその代り其れ相應の防寒具が配給されます防寒帽から防寒服防寒手袋防寒シャツ防寒靴更に立派な防寒外套といふ様に何から何まで行届いた全く有難い親心には實際感謝を致します此の上は一意専心報恩感謝の眞心の命ずるまゝに滿洲建國の聖業翼賛に邁進すべく張切つて居ります慈々意義深く思ひ出多い紀元二千六百年の年も後幾何もなくなりました何卒御多幸の裡に此の年を送られ新しい年を迎へられます様遠く北滿の地より遙かに御祈り致しまして筆を止めます 敬具

康德七年十二月八日

大西校長先生

勃利大訓所 加藤中隊 松山和男

(一) 鷺見勇雄君よりの書信

拜啓 其の後皆様には御元氣で運動に勉強に作業に一生懸命の事と存じます實習地も擴張されたとの事とて忙しいでせう僕等も農耕は大方済み今は乾草刈です見渡す限り廣漠たる大原野で思ふ存分鎌を振廻し洋草雜草を刈つて居ります加藤中隊長先生を始めとし中隊幹部の諸先生も訓練生も皆元氣で働いて居りますから御安心下さい此の間大西校長先生が全国の教學奉仕隊の諸先生と一緒に僕達の一面坡訓練所鳥取郷土中隊に来て下さいまして十日間に亘つて色々御話を聞きました其の時皆様からの慰問文も貰ひまして有難う御座いました詳しい事は校長先生が歸つて話される事と思ひますが七日の夕には七夕祭の茶話會があり故郷の舊盆の十二日夜は練兵場の中央に大きなかゞり火を焚いて其處で盆踊大會がありました我が加藤中隊は三朝小唄安來節滿洲開拓の歌を唄ひながら踊りました踊りの最初に一同は故郷の祖先を禮拜してから會が始まつたのですが午後八時頃になると澄み切つた月が上つて何とも言へないよい夜景でありました最後に一千餘の全隊員が滿洲開拓の歌を歌ひながら踊つた有様を想像して見て下さい愉快であつたばかりでなく實に又男性的な壯觀でありました遠く何百里幾山河離れた異郷を郷土色の一色に塗りつぶした其の夜の感激は一入深いものがありました皆様も愉快な盆を送られた事でせう最後に諸先生始め生徒諸君の御健康と御幸福を御祈り致して御別れ致します

康德七年八月三十日

一面坡特別訓練所加藤中隊 鷺見勇雄

角盤校諸先生並生徒諸君へ

滿洲開拓の歌

- 一、大陸色に焼き付けた五體がつちり先驅者の誇りに燃えて陽が上る廣い舞臺だこの朝だやるぞ何處まで根かぎり
- 二、花嫁部隊今日は早やモンベ凍々しい野良仕事駒よいななけ雲千里骨を埋める覺悟なら住めば都よ北の空
- 三、日滿結ぶ日の丸と五色の旗を組立てて門も麗らかな村景色銃と氣負つた開拓の戰士我等が氣は弾む――
- 四、狭い天地であがくより胸もすくよな大原野拓く男の子の心意氣見よ日毎に伸びて行く第二の祖國我が樂土

(一) 義勇軍母の通信

(一) 吉川洋三君の母の書信

御免下さいませ先日は夜分に罷出まして晩くまで御邪魔致しまして大變失禮致しました御許し下さいませ
時に先日洋三の事を耳に致しましたが昨日やつと手紙と葉書が一度に二通まで着きました病氣でなかつたそうですのですつかり安心致しました手紙が来て見ますと心配したのが馬鹿らしいですけれ共親心は仕方がないもので御座います良い方には考へません病氣で床に就いて居て私の事ばかり思つて居るのではあるまいかなどと思ひ寫眞を取出しそばに居る洋三に話す様になせお前は手紙をくれないのだこんな心配するのにな等と一人言言つて居りました何といふ馬鹿な事だつたでせう修養のない私ですから一寸した事でも騒動しましてはづかしい氣持で一ばいで御座います之から私も大陸的な心を持ちたいと思ひます負ふた子に教へられて淺瀬を渡るとはこの事で御座いませう手紙はお送り致しますから讀んでやつて下さいませ取とめもない事を申し上げます御許し下さいませ かしこ

一月二十八日

吉川 さく

大西校長先生

〔母に宛てた手紙の全文〕

お母様兄様も姉様も御元氣ですか僕等は正月も終り本格的に教練學科をする様になりました義勇隊加藤中隊の諸先生の考へでは僕等全員を農學校卒業生以上の實力をつけてやりたいといふ考へださうでして實に勿體ない事です衣食住何も彼も不足の無い様にして貰つた上學力もつけて貰ひ又訓練を了へてからは十町歩の自作農になる所まで面倒を見て下さるといふ事は全く僕が國策の第一線に在る義勇軍に志願したからこそです義勇隊は辛い苦しい事ばかりと聞いてゐた事と外れて實に楽しい愉快な所です内地で軍需景氣で工場に入らうと思つてゐる人にお母様からも義勇軍に行く様勧め上げて下さい一時の目先の利益に惑はず最後の勝利ある義勇軍に志願して大滿洲開拓の聖業に参加する様勧め上げて下さいしかし義勇軍は百パーセント皆樂な事ばかりではありません中には少しは辛い事もありますけれどもその辛い事を成し遂げた時の氣持といつたら實に愉快なものですお母様の日頃の訓練である「人間は苦しい事を凌がなければ立派な人間にはなれない」とのお言葉を何時も思ひ出して勵んでゐます昔から立派な人間になつた人は皆困苦缺乏に打勝つた人ばかりですお母様僕の將來を見て下さい幼い時に父を亡くし母の愛の手で幾多の心配をかけて此處まで成長させて頂いたからにはきつとこれまでの御恩をお返しいたしますお母様家に居た時の我儘はすべてお許し下さいませお母様僕は加藤完治先生の「元氣に」「仲よく」「迷はず」三つの教訓をよく心に刻み立派な人間になります

此の頃の起床は午前七時です七時半に點呼禮拜それがすむと日本體操を致します嚴寒零下三十度といふのに身體は忽ちぼか／＼と温かになりますお母様驚かれるでせう何分故郷に居た時分は寒い時はぶる／＼ふるえて居たものですからね防寒服もあり滿洲は空氣が乾燥してゐる爲内地より大變樂です今春は中隊の後方にある草原を開墾する事となりましてので隊員一同大いに張切つて居ます何しろ幅一千米長さ五百米の大きな場所ですから勿論トラクターで開墾いたします此の間送つて戴いた寫眞は早速僕のアルバムに入れました故郷の寫眞が實に懐しく思はれます此の間入院した友達が

目まひを起した際僕が看護してやりましたが家に居た時僕が病氣をするとお母様が介抱して下さいましたことが思ひ出されましたお母様はどんなに心配してゐて看護して下さいたかが今初めて眞實に分りまして僕はほんとに有難かつたとお禮を述べる心持で泣きましたそれはお母様僕はいとお母様をもつて居ると思つて嬉しくて泣いたのです僕も義勇軍に来てからはちつとも泣きませんよ泣いたりなどすればはづかしいからですよ

一月十九日

お母様

〔二〕長尾勝則君の母の書信

お兄上様此の間はお留守中にお邪魔いたしましたしてお姉上様に色々御迷惑をお掛けいたしましたして有難く存じました厚く御禮申上ます。

昨日勝則から手紙と寫眞とを送つて呉れました読んで居る内に我が子ながらしつかりして來たと嬉しくもあり可愛くて堪らぬ思ひが致しまして久々振に嬉し泣きに泣きました私一人讀めばよいのですが何となくお兄上様にも一度讀んでやつて貰ひたい氣持になつたもので御座いますから早速今日手紙と寫眞とをお送りすることに致しましたお兄上様にはさぞ親馬鹿とお笑ひになるではないかと思ひますけれども幾ら笑はれても致し方がありません寫眞は勝則からお兄上様に差上げて呉れと言つて居りますから貰つてやつて下さいませ。けれどもこれまで勝則が呉れた手紙や葉書は内原に居る時から現地で三年間呉れたものを全部残してゐますので一讀後は送り返して下さる様お願申上ます寒さ尙加はるばかりの折で御座いますから折角お氣をつけてお勤めなさる様お祈り致します。

乍末筆お母様おん姉上様にも厚く厚くおん禮申上置下さる様お願申上ます。

一面坡特別訓練所加藤中隊 吉川洋三

一月二十五日

壽子

お兄上様

〔註〕 この手紙の兄上様とあるは大西角鯨校長のことであり、隨而差出人は校長の實妹、義勇隊員長尾勝則君は校長の甥である。

(母に宛てた手紙の全文)

御母上様お便り有難う御座いましたお手紙に依りますれば御母上様は至つてお元氣の由安心致しました日夜御父上様の御看病にお疲れの事とお察し致します私もお蔭様で至極健在ですから御安心下さいませお母上様から去る十五日送つて戴きました小包の品は小隊全員で美味しく戴きましたあちらでもこちらでも内地のお餅は満洲に来てから始めてだ長尾君有難う長尾君有難うと言つてお禮を言つて呉れた時はお母様の心づくしの有難さがわかりお母様に何とお禮を言つてよいかわからず胸が一ぱいでした優さしいお母様を持つた私は實に世界中での幸福者たと心から思ひました小包の中にありました色々なお心盡しの品も有難く受取りました。恰度あの所は舊寒河の警備勤務をやつて居りました手紙も書く開がありませんでした私達義勇隊の者が僅か八名で寒河全隊の兵舎を警備するので手紙を書くところか難る事すら出来ない位重大な責任を感じましたそんな譯でお禮の手紙も遅れまして申譯がありません

當訓練所は本月末日に學科の査閲がありますので毎日學科の勉強です此の査閲が終りますと二月末頃から修學旅行があります全滿の各所を見學するのですが大連の方にも行きますので皆楽しんで居ります約十五日間の旅です早いもので義勇隊生活も愈々本年三月で終りますそれからは義勇隊開拓團を組織するのですが今の所移行先はわかりませんわわかり次第お知らせいたします。

同封の寫眞は最近のもので大きくつたなあと思ひ喜んで下さいお母様私も今年明けて十八歳になりました二人寫して居る分の一人は東伯の人で私よりも年が大きく本年は入營することになつて居りますが少し位年は大きくても義勇隊では誰も友達である關係上皆が實に仲よく暮して居ます。

三枚の内一人寫した分の一枚は大西の御伯父上様に勝則が送つたと言つて上げて下さい去年の夏大西の御伯父上様が綴芬河訓練所に教學奉仕隊員として來られた時に會つた時よりもずっと太り防寒服を着て防寒帽を冠つて居りますから年よりも大きく見えるでせう

では今日はこれで失禮いたします皆様様によろしく言つて置いて下さいませ

一月九日

滿洲綴芬河訓練所車田中隊 長 尾 勝 則 拜

御母上様

(4) 最近の加藤中隊長書信

謹啓 其の後は御無音に打過ぎ洵に申譯がありません此の度は山陰道否全國に冠たる成績にて義勇軍郷土中隊御送の有様を承り殊に先生多年の宿望たりし拓植教育徹底の結果としての一校一箇小隊編成送出たる角鯨小隊送出の願望も愈々實現いたしたる由實に欣喜雀躍心強く存じます。

これ偏に先生の御指導と職員各位の御健闘の賜と存じ邦家の爲大慶至極に存じ遙に敬意を表すると共に涙ぐましく御心勞に對し何とも申上様がありません吾々昨年渡滿せる勃利郷土中隊全員も本年の新郷土部隊編成送出成績の良好なるを聞くや遠く此の地で萬丈の氣焔を上げ大いなる誇りを感じ得ることが出來たのを實に何よりも嬉しく思ひます厚く御禮を申上ます。

只今大陸勃利の朝夕は尙寒さ烈しく春光遅々として野をこめ丘を包んで紫に煙り黄塵と共に春の訪れを覚える頃とはなりましたが未だ河流は凍結し若草萌え出でざる春です然し北行する雁は日毎に碧空を渡りて行く様内地とは異り奇異の感を覚えます三月中は守備隊よりの指導應援の下に軍事教練を實施致し査閲成績も良好でありました本月中旬より愈々待望の農耕に取掛る豫定にて地下二米位の結凍地を掘り起し温床を作り播種も本日終る筈です我が中隊も農産飼料の増産を目標とし野菜は自給自足の立前にて耕作面積約八十町歩内水田十町歩を耕作する意氣込みであります作業人員は特拔生産米報國隊指導學校合格生其他勤務生を除き百名内外ですから相當頑張らなければならぬと全隊員張切つてゐます級傾斜の大丘陵で目の届かぬ程の遙か彼方まで續く農場肥沃なる土地愈々土と戦ふの時期と相成りました。

角盤傳統の精神と拓植教育愈々新體制は先生多年の努力が實を結ぶ折となりましたが先生益々御健康で日本初等教育の爲御奮闘をお祈り致します私渡滿致しまして滿一年になります先生の膝下で御指導を受けました滿三箇年間の事ども回顧いたしました今更慚愧に堪へないものがありますけれども今後層一層義勇隊訓練に精進致し先生の御期待に副はん事を日夜努めてみます今後共御指導御鞭撻を懇願致します。

國民學校といふ新しき體制の下に昭和十六年度の新年度をお迎へになり新鋭なる意氣をもつて角盤教育を愈々充實せしめ益々實績をお挙げに相成るべく日夜御奮闘になつて居る様を想像申上げて遙かに先生の御健勝をお祈り致します末筆ながら職員各位にもよろしくお傳へ願ひ上げます。

康德八年四月四日

滿蒙開拓青年義勇隊

勃利訓練所第一大隊第二中隊長

加藤 律

大西校長先生大座下

昭和十六年四月一日印刷
昭和十六年五月一日發行

興亞教育ト國民學校 第一卷
普及版 定價三拾錢

著者 岩本憲治
東京市麹町區一番町一九ノ四

發行者 猪狩恭介
東京市麹町區一番町一九ノ四

印刷者 藤屋印刷所
東京市芝區新橋二ノ二



發行所

東京市麹町區一番町十九番地
財團法人 滿洲移住協會
電話九段(33)五〇六七—九番、四九一〇—一一番
振替口座東京七七九七八三番

415
437

終

